

石造物からみた中世・大村の様相と仏教文化

第一節 石造文化

私たちの周囲には、由緒も知れない数多くの石造物がある。普段は何気なく見過ごしているが、そこには造立当時の社会の一面を探ることのできる豊かな内容が含まれている。

石造物に関する研究は、江戸期更には明治期にその濫觴（わんしやう）を求めることができる。寛延四年（一七五二）の「仏足歌解」（橋枝直）では奈良・薬師寺の仏足石の銘文がとりあげられ、また寛政十三年（一八〇一）の「集古十種」では板碑などに関する一〇〇点以上の拓本が収録されている。明治期に編纂された「肥後国古塔調査録」（古社寺堂塔調）は、明治十五年以前の紀年銘をもった古塔等の考証並びに解説本として著名である。長崎県内にあつては、平戸市宮の浦の「沖の宮塔」について、文政五年（一八二二）に書かれた「志自岐沖之宮石鉢圖・沖嶋全圖」（公益財団法人 松浦史料博物館蔵）に当時の塔形が着色絵図として残されている。また、ここで問題にする大村藩域では「郷村記」に各郷ごとの著名な古石塔が記述されており、その資料的価値を今に伝えている。

九州において石造物研究に先鞭をつけたのは小川琢治の「九州の石仏」（『國華』二九二・二九三）で、豊後臼杵などの磨崖仏についてその美術史上の価値を論じた。古石塔については天沼俊一が考古学的視点から五輪塔（ごりんとう）や宝篋印塔（ほうきやくいんとう）について論じ、大正十四年には浜田耕作を中心に『豊後磨崖仏の研究』がまとめられた。

ただ石造物に関する学術的研究は、故・川勝政太郎により「石造美術」という名称が与えられてから本格化したといっても過言ではない。研究エリアも関西・関東更には東北圏・中国四国圏・九州圏など全国規模での調査・研究が行われ、しかも宝塔（ほうた）・五輪塔・宝篋印塔など研究対象の石造物に基本的な位置づけを行った上で、川勝が主宰した『史迹と美術』

（昭和六年創刊号発行）を通じて各地の優れた石造物が解明された。その成果はいろいろな出版物で紹介されている¹⁾。ただこれまでの石造物に関する研究は、その「石造美術」という用語に表れているように工芸品としての美術史的研究に重きがおかれ、扱う対象も古式で完形塔的な優品が中心であった。全体として歴史文化財としての位置づけが弱かったように思われる。そのため残欠や形式化してくる後代の塔に関しては研究対象の外におかれ、それら残欠塔などから地域社会を考察するような試みは、ほとんどといっていいほどなされていない状態であった。

今後の石造物研究の一例として、石造文化圏の問題がある。後述するように、中世の石造物、特に石塔類に関しては、その様式・使用石材などから地域独自の石造文化圏が設定される。しかも中世における石塔類は、限定される造立階層を前提に、その石塔に関わる有力層のもつ生活文化と密接に関係しており、そこから石造文化圏の問題が単なる石工の問題を超えて荘園など当時の政治・社会的な環境と密接に関連していることが分かってきた。更に、石塔類の建塔状況からは、各地における階層分化の進展状況や鄉村制の成立過程等を読みとることも可能であるし、また中世における宗教事情を探ることも可能である。

この石造文化圏について最初に問題提起をしたのは田岡香逸である。田岡は、『石造美術概説』（一九六八）更に「西撰石屋の石造文化圏とその石大工」（『地域史研究』第十巻 一九八一）において石造文化圏の定義を行い、「同人または同系の石工の作品が分布している地方」を総合して石造文化圏と名づけている。この点において田岡の石造美術に対する態度は、これまでの先学の業績を継承しながらも新しい視点をもって石造美術を再編しようとしたものとして高く評価され、石造物を美術工芸品としてとらえる傾向からの脱却を図っている。ただ、田岡が定義した石造文化圏は基本的に関西地区における石造物のあり方から述べられたものであり、同人又は同系の石工の視点からだけでは全国各地の石造文化圏を割り出すことは困難である。むしろ使用石材と同人又は同系の石工を含めた同系の様式・形態に着目して設定すべきであろうと考える。

また、石造物研究が進んでいる関西にあっても、この石造文化圏の問題はこれからの研究にかかっている。確かに

単品ごとの優れた完形塔については、これまでの研究から美術史的な位置づけは行われているが、その石材・様式による石造文化圏の研究はようやく始まったばかりといっても過言ではない。その一例として日引石塔の問題がある。十四世紀後半から十五世紀代にかけ福井県高浜町日引地区で制作された日引石塔が、南は鹿児島県坊津から北は青森県十三湊まで日本海から東シナ海沿いに広く搬入・建塔されている。その中で特に集中的に建塔されているのが対馬や五島列島更に平戸島など長崎県下の国境をまたぐ島々であるが、その日引石塔について、これまで地元関西塔の中でどういう系譜につながるのか不明であった。ただ最近になってようやく研究が始まり、関西における石造文化圏が近江文化圏・京都(山城)文化圏・大和文化圏などに分類されるようになった。その結果、日引石塔は京都・山城の石造文化圏に属する可能性が高まった²⁾。関西石造文化圏が解明されてくると、九州全域に搬入されている日引石塔以外の中央形式塔の制作地が想定され、石塔類の搬入を通じた両地の政治上の関係が浮上してくる。

本稿は、これまで述べてきたような石造物を美術工芸品としてみる立場から離れ、中世・石塔類の建塔状況や銘文を通して、文書資料では解明できなかった中世社会の様相、その一端を探ろうとするものであり、その対象地域は長崎県その中の旧大村藩域である。

いうまでもなく長崎県は、対馬や五島列島更に平戸島など多くの国境をまたぐ島々をかかえている。その島々は、中国大陸・朝鮮半島と日本列島の狭間にあり、海上を舞台にした活動は東シナ海から日本海まで広範囲に及んでいる。その点で東アジアの動静を直に受ける位置にあり、その中で各島々は生き抜き、単なる地方史の域を超えて中央史に直結するような豊かな歴史をもっている。そのような島々に展開される中世・石造物は、本土部の建塔状況とはかなり異なっている。一時期しかも遠隔の中央形式塔が大量に運ばれ集中的に建塔されていると思えば、その後は全く建塔されない空白期間があるというような、まさに浮き沈みの激しい様相を展開している。また、そのような島々と長崎県本土部、特にここで問題にする旧大村藩域の建塔状況との比較は、いわば海と陸の比較に通じ、中世社会の性格その一端を垣間見ることができる。つまり現長崎県下に展開される中世・石塔類のあり方は、日本中世史の一端を凝

縮したようなものであり、その資料的価値は非常に高い。

以上の各点を視野に入れながら、九州圏及び長崎県全域から見た旧大村藩域の石造物に焦点をあて、そこから見えにくる中世・大村領域の様相を述べてみる。

一 石造文化と生活文化

中世における石造物は、基本的にその地域で採れる石材を使用し、しかも、例え同じ種類の石造物であったにしても形態は地域（文化圏）ごとに微妙に異なっている。このことから編年の一番の決め手となる形態上の特徴とその変遷は、一般に知られる中央（大和・山城）のそれに頼ることなく地域と使用石材ごとに編まなければならないというまでもない。そこに石造文化圏を設定する背景があるのだが、このような文化圏ごとの特徴は地域単位での非常に個別的な中世社会の様相が石造物を通して反映しているといっても過言ではない。

九州全域にあつて、その主な使用石材は凝灰岩（阿蘇凝灰岩）と安山岩である。特に福岡県・大分県・宮崎県・熊本県・鹿児島県など阿蘇山周辺の地域では凝灰岩が主であり、そこからやや離れた佐賀県が凝灰岩と安山岩を併用している。もちろん、地域によっては上記二種類以外の石材も使用している。鹿児島県の川辺郡などでは山川石と呼ばれる凝灰岩の一種が用いられ、また主に太宰府以北の福岡県などにあつては非常に早い段階から硬質の花崗岩が使用されている。更に角礫凝灰岩や玄武岩、また一五〇〇年代後半以降になると各地で軟質の砂岩が使用され、制作時期と地域の状況により、その使用石材は多種多様である。

ところで、凝灰岩を使用している地域が広範囲に及ぶことは上述したとおりであるが、ただ同じ凝灰岩を使用しているでも各石造文化圏ごとに独特の形態をもっている。例えば宮崎県の五輪塔は軒面が非常に大きくとられて他地域の五輪塔のそれとは明らかに異質であり、また熊本県（特に菊池地方）の宝篋印塔では基礎を数段の階段状にするなど他の文化圏からは想像できない形態をもっている。更に大分県の一地域（大野郡）では、南北朝期を中心に「げんしやうとう玄正塔」

と呼ばれる特異な形態をもつ宝篋印塔が知られている。このような傾向は何も凝灰岩だけに限ったことではなく他の安山岩などでも同じであり、石材は同じでも地域ごとに特色ある個性を読みとることができる。

ところで旧大村藩域を含む長崎県は、西彼杵半島産の緑色片岩と多良山系などの佐賀県側で採れる安山岩を使用しており、それぞれに他地域に見られない個性豊かな形態をもっている。特に緑色片岩を石材にしている地域は日本列島全域にあっても数カ所であり、そこに全国からみた長崎県の中世・石造物の特異性が示されている^③。

このように中世の石造物特に石塔類は基本的に現地又はその周辺の石材を使用しているが、各石材の石質の違いや石工技術の高低、また石工自身も個性ある意匠などによって石造物の形態に微妙な差異をみせている。

このような石造文化の違いは当時の各地域ごとの生活文化や精神文化と深く結びつき、結果的に地域の石塔として生活文化そのものに包含されていったと考えられる。そのために、例えば佐賀型の安山岩製塔の石造文化圏では、基本的に他の石材使用の石塔類は建塔しないし、また西彼杵半島（長崎県）の緑色片岩製塔文化圏に属する人々は、これまた緑色片岩製塔のみ建塔し他の石造文化は受け入れない状況を生み出す。この点は、中世の石塔類の性格が陶磁器や銭貨などの性格と基本的に異なるところであり、それだけにその地域の石造文化とは異質な石塔類が確認される場合には、その建塔の背景に人々の移動を含めた政治的社会的な問題が想定されるのである。この異質石塔については第一節第三項で詳述するが、中世における石造文化は、中世に比べより広域的に商品化が一般化してくる近世以降の石造文化とは基本的に異なった個性豊かな地域色を示している。

二 長崎県の石造文化

長崎県下の中世・石造物は、使用石材と塔形態・様式から、表6-1「石材・塔形式による分類」に示したように大きく三グループに分類される^④。ただ、この分類はあくまでも一般的な傾向を示したものであり、より具体的に見れば、中世の不安定な政治・社会状況を示唆するように複雑な様相を展開している。

表6-1 石材・塔形式による分類 (①石材産地 ②制作開始時期・制作年代 ③分布)

第一グループ	<p>①西彼杵半島産の緑色片岩を石材としたもの。</p> <p>②滑石製石鈿の彫出技術が仏教関係石造物の制作に関係した可能性が高い。平安後期から滑石製経筒や単体仏の制作、更に仏塔として承元三年(1209)銘宝塔(杵岐鉢塚)や川棚永仁五年(1297)銘五輪塔などが知られ、基本的には室町後期まで継続して制作される。</p> <p>③島原半島・諫早・北高来郡・松浦市今福地区を除いた県本土部(旧大村藩領域を含む)更に対馬・杵岐を除いた平戸・五島などの島々。佐賀県鹿島市や嬉野市、西有田でも一時期建塔。</p>
第二グループ	<p>①安山岩を石材としたもの。採石場は、主に多良山系など佐賀県側。また、雲仙山系のデイサイトも一部で石材として使用。</p> <p>②紀年銘はないが、現在のところ最古の仏塔と思われるものは、西有家(島原)の葺山宝篋印塔で、形態より1300年代前後(鎌倉後期)と思われる。南北朝時代のものとしては、県内では遠嶽石塔群(諫早市小長井町)や南有馬町古園石塔群などがある。</p> <p>③県内本土部は、島原半島・諫早・北高来郡(多良山の金泉寺を含む)・松浦市今福。島では杵岐島・福島など。なお、第一グループの緑色片岩製塔文化圏内であっても、16世紀後半以降になると、緑色片岩製塔の製作困難を受けて建塔されてくる。</p>
第三グループ	<p>①花崗岩と安山岩質凝灰岩を石材としたもの。花崗岩は関西方面(兵庫県御影)、安山岩質凝灰岩は福井県高浜町日引で採石・製作したもので海路搬入されたと考えられる。</p> <p>②県内、主に対馬・五島・平戸などの島々で確認されるもので、花崗岩製の一部(平戸・大渡長者五輪双塔)は鎌倉後半、他のほとんど(約400基分)を占める日引石塔は1300年代後半から1400年代が中心。</p> <p>③対馬・五島(特に新上五島町日島)・平戸・福島などを除く県内の島々。本土部では松浦市今福・調川、佐世保市江上(小島寺)、西海町(唐人墓)、野母崎観世音寺など</p>

長崎県内の中世・石造物は、その石材と彫出内容(主に形態)から上記三グループに分類されるが、特に第一・第二グループにおいては、その使用石材が建塔に関わる個人・勢力の生活文化と密接に関係していることが理解されると思う。

ところで、旧大村藩領域における中世・石塔類は、第一グループの緑色片岩製塔文化圏に属している。西彼杵半島が緑色片岩製塔の石材供給地であることを考えれば当然のことであるが、ただ、大村地方(じかた)特に現大村市内の中世・石塔類にあつては、まず最初に鎌倉後期に佐賀型安山岩製塔が建塔され、それからやや遅れた鎌倉末期頃から西彼杵半島産の緑色片岩製塔が建塔されてくる。これがどういう意味を持つのか非常に興味深いところではあるが、大村氏の本貫地といわれる佐賀県鹿島市の安山岩製塔文化圏との関係が影響している可能性が高い。

なお、川棚以北の緑色片岩製塔文化は、東彼杵・西彼杵地区などとは異なり、その一部に佐賀型安山岩製塔が緑色片岩製塔に割り込む形で建塔されるという複雑な石造文化を展開している。

◆ 異質石塔

異質石塔とは、他の石造文化圏に属する石塔類がその域内を越えて異なった文化圏内に建塔された石塔をさす。つまりは当地の



写真6-1 自性院宝篋印塔 (東京都江東区)

文化圏内にあつては本来建塔されるべきものではない石塔をさすが、この異質石塔については、その背景にいくつかの要因が考えられる。

異質石塔の一事例として、東京都江東区亀戸(自性院)にある永享七年(一四三五)銘緑色片岩製宝篋印塔があげられる [写真6-1](#)。この宝篋印塔は、その形態と石質から明らかに長崎県西彼杵半島産の石塔であり、関東の石造文化圏にあつては異質石塔で

ある。人間の生活文化に関係深い石塔は、その石塔自体がもつ性格からして、最初の建塔地から更に次の遠隔の建塔地に移動し建て直すという二次的移動は、一部の例外を除いてまず考えられない。この点からして、この自性院塔は、十五世紀前半頃に西彼杵半島産の宝篋印塔を遠路関東まで運んで建塔した可能性が高い。その際、西彼杵半島産緑色片岩製塔が広域商品化されていない一地方石造文化圏内にとどまった石塔であることを考慮すると、自性院塔の建塔に関わった人々は多分に現長崎県に非常に関係深い人々であった可能性が高く、十五世紀前半期における当地と関東との関係が浮上してくる。自性院塔建塔の背景にいかなる事情があつたのかその具体的な歴史的背景については今後の課題であるが、中世における海を通した遠隔地交流があつたことは間違いないものと考えられる。

また自性院塔と同じく九州内から関東方面に搬入された石塔類として、東京都北区田端の与楽寺宝塔がある。この宝塔は溶結凝灰岩製で、円筒状の宝塔塔身と瓦棒かわらぼうや垂木などを彫り込んだ笠の残欠である。もともとは別物と思われる、瓦棒などを克明に彫り込んだ笠は層塔の笠と思われる。塔身は、その四面に蓮座上の二重光背形彫り窪めを作り、内に四方仏を厚肉彫する。制作時期は、その形態からみて鎌倉時代後半頃と思われるが、この与楽寺宝塔塔身並びに笠については、かつて川勝政太郎も指摘しているように、その石材並びに形態からみて明らかに現熊本県またその周辺で制作されたものと考えられる。

この与楽寺塔と同形態・同石材のものは、佐賀県太良町の竹崎観世音寺の境内でも確認される。竹崎観世音寺は有明海西岸に位置する古刹で、鎌倉時代末期に想定される二基の層塔（佐賀県指定重要文化財）があることで有名である。ここで確認される宝塔塔身も、与楽寺宝塔と同じく円筒形で、正面のみに仏像を厚肉彫りしているが、その全体の形状は同系のものである。また与楽寺の瓦棒などを克明に造り出した層塔の笠も確認され、観世音寺の二基の層塔の笠に酷似している。このことから、これら観世音寺の宝塔や層塔などの凝灰岩製塔も熊本県側から搬入されたものと考えられる。

この観世音寺層塔を建塔した背景を考える場合、その制作時期である鎌倉時代後半という時期と当寺が多良岳山岳仏教に関わる真言密教の古刹である点は注目すべきである。鎌倉時代後半といえば未曾有の国難である蒙古襲来が起った時期であり、それに対処するため、特に西日本の有力な神社仏閣では異国降伏のための祈祷が盛んに行われている。このことを考えた時、観世音寺でも蒙古襲来に対処するための異国降伏の祈祷があつたことは十分に想定される。この点は別項（第一章第二節第二項）で詳述するが、観世音寺層塔の建塔背景には、当時の政治的社会的な要因があつたものと思われる。

ただ、与楽寺塔については、何故、熊本県で制作された石塔が関東まで運ばれ建塔されているのか分からない。自性院塔と同じように中世における広範囲にわたる海上を通じた交流があつたことは間違いないものと思われるが、具体的な背景については今後の課題である。

次に関西や北陸方面から九州に搬入された石塔について若干の事例を紹介したい。その代表的な石塔類といえば福岡県高浜町日引地区で制作された日引石塔で、九州の東シナ海側特に長崎県内の島々（対馬・五島・平戸島など）や福岡県芦屋、鹿児島県坊津更には日本海沿い（北は青森県十三湊まで）に大量に搬入されている。その際、日引石塔は日本で最初に広域商品化された石塔として日本列島の北から南まで運ばれ建塔されたように考えられる。また、日引石塔とほぼ同じ時期に関西で制作された花崗岩製塔も九州圏をはじめ各地に搬入されており、旧大村藩域では西海市面高（唐人墓）で確認される。

また、有明海に面する竹崎観世音寺（佐賀県太良町）には鎌倉時代末期に想定される二基の層塔（県指定）があることは先述したとおりであるが、ここで笏谷石製の宝篋印塔や宝塔などの残欠が数基分確認される。笏谷石とは、福井県足羽山の北西側山麓の集落・笏谷地区で採掘される火山礫凝灰岩である。この笏谷石の利用の歴史は古墳時代まで遡ることができ、その伝統は中世を通じて受け継がれたが、特に笏谷石が本格的に利用されたのは、朝倉氏が一乗谷に拠城を構え戦国城下町として繁栄してからと言われている⁵⁾。

竹崎観世音寺で確認される笏谷石製塔は、特に宝篋印塔塔身に刻まれた独特の越前式装飾文様（月輪を小蓮弁でめぐらす装飾）からみて十四世紀前半（鎌倉時代後半）頃の可能性が高い。この時期に何故福井県産の笏谷石石塔が遠路竹崎まで搬入されているのか、その理由については何も分かっていないが、上記の自性院塔や与楽寺塔と同じく中世における海を通じた遠隔地交流があったことは間違いない。とりわけ建塔地の竹崎観世音寺が真言密教の古刹であることを考えると、その搬入に宗教的な何らかの要因が絡んでいたように思われる。

また種子島の西之表市（鹿児島県）にある御坊墓地では、明らかに中央形式塔である花崗岩製の五輪塔（現総高一〇・五・五センチメートル）と宝篋印塔（総高七四センチメートル）がある。現在は二基にまとめられているが、五輪塔は寄せ集めであるが水輪は別物であることから、本来、五輪塔は少なくとも二基建塔されていたと思われる。この種子島塔については、当時海上交易に大きな影響を及ぼした西大寺律宗が関係したものとされている⁶⁾。

以上述べた各異質石塔の事例は、石塔自体はその石塔が属する文化圏内で制作され、そこから現在の建塔地である遠隔の地に運ばれたものと考えられるのであるが、それとは逆に石工自体が遠隔の地に向き、現地で作した事例がある。その最たる事例は、宋人石工伊行末の後裔石工集団である伊派の活動である。このことについては藤澤典彦らにより報告されているが、この伊派の活動の背景には西大寺律宗の地方展開があるといわれている⁷⁾。藤澤の報告によれば、徳治二年（一二三〇）銘の岡山県笠神磨屋碑は伊行恒（行経）が「石切大工」としてあり、そのほか岡山県では嘉元三年（一二三〇）銘の保月宝塔はじめ鎌倉後期の紀年銘をもつ石塔が数基確認されている。これらの石造物

のうち、磨崖碑は明らかに石工が現地に出向いていることは間違いないが、その他の石造物についても石工が実際に現地に出向いて制作したものと考えられる。

ただ、岡山県をはじめ広島県など主に瀬戸内に展開される石塔類は、九州に見られるような独特な地方色を見ることがなく、むしろ広域の畿内石造文化圏に入るものと考えられる。そのため、保月宝塔はじめ伊派による石造物は、ここで言う異質石塔には当たらず、むしろこの伊派の現地での制作が影響してその後の瀬戸内石造文化が展開されていったように思われる。

異質石塔については、今後も多く事例が確認されてくると思うが、特にその搬入の背景にある中世社会の様相を探る上から石造物研究の重要なテーマの一つになると考えている。

以上、異質石塔について若干の事例を紹介したが、その搬入の背景については幾つかの要因が考えられる。東京都亀戸自性院の永享七年銘綠色片岩製塔や東京都北区与楽寺宝塔については人々（長崎県と熊本県）の移動を含めた遠隔地交流、佐賀県竹崎観世音寺の笏谷石石塔については宗教的意味合いによる搬入、また福井県高浜町の日引石塔の搬入については、主に近世以降の石塔と同じように非常に早い段階（十五世紀前後頃）での広域商品化された石塔として搬入されたものと考えられる。

四 初期石塔の三つの建塔パターン

平安時代後期から鎌倉・南北朝時代までの石塔の建塔には、三つの大きなパターンが見られる。

一つは平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての建塔で、主な種目として磨崖仏や宝塔などがあげられる。白杵磨崖仏などはその代表的な事例であるが、特にこの傾向は地方にあって顕著に認められる。長崎県の場合、最初に登場する石塔は笠塔婆や宝塔で経塚に伴って出現する。壱岐・鉢塚宝塔（宇賀6-1-2）は、長崎県内で整形された石塔として最古の紀年銘をもつ石塔であり、滑石を石材としている。その基礎部分に「承元三年」（一二〇九）の紀年銘をもち、



写真6-2 吉岐鉢塚宝塔

遺構として経塚との共伴が考えられる。この経塚と宝塔との関係は、福岡県宗像市稲元で出土した「仁平四年（一一五四）銘宝塔（滑石製、宗像大社神寶館所蔵）」などでも想定される。岡山県倉敷市安養寺経塚出土の宝塔は土製であるが、同所の経塚遺跡から応徳三年（一〇八六）の願文を刻んだ瓦が出土しており、平安時代後期の宝塔と考えられる。また京都市左京区の鞍馬寺宝塔も、保安元年（一一二〇）銘経筒を出土した経塚上に建塔されていたものである⁸。このように平安時代後期の宝塔は、正治二年（一一二〇）銘の相良寺角宝塔（熊本県山鹿市菊鹿町）のように一部に個人的墓標として建塔されたものもあるが、その大部分は末法思想が刺激となって埋経ひいては経塚に関係して建塔されたと考えられる。この点は、笠塔婆においても同じ建塔目的が考えられる。

ところで、平安時代後期の造塔としては自然石塔婆もあげられる。長崎県では「西郷の板碑」（諫早市 写真6-5参照）として県指定有形民俗文化財となっている諫早市の自然石塔婆がそれに当たり、碑面に「建久元年（一一九〇）と陰刻されている。佐賀県武雄市北方町の「勇猛寺俱利迦羅龍王三尊碑」（平安後期）も自然石の古碑であるが、福岡県嘉穂郡桂川町の「筒野五智如来三連碑」（養和二年銘 一一八二）や熊本県熊本市坪井町本光寺の「本光寺石塔婆」（安元元年銘、一一七五）などは整形された塔婆として建塔されている。鹿児島県国分市の大隅国分寺重層塔は「康治元年（一一四二）銘をもち、在銘石造層塔としては全国でも最古級の古塔である。そのほか、白杵市中尾の嘉応二年（一一七〇）と承安二年（一一七二）銘の五輪塔に代表されるように、この平安時代後期には、石塔として五輪塔も建塔されている。

ところが、この平安時代後期を中心とした造塔作善行為はその後しばらく下火になり、今度は十三世紀後半以降の鎌倉時代後期になって突如、第二のピークが表れる。長崎県内でみれば、島原半島・雲仙山系と平戸島などで見られる。

茸山宝篋印塔（南島原市西有家町）や野田名五輪塔（雲仙市千々石町）、田ノ平宝篋印塔（雲仙市吾妻町）、更に平戸島の大渡長者五輪双塔（花崗岩製）は、その代表的な鎌倉時代後期の石塔である。特に島原半島の三基の石塔は、その時期と建塔地の関係から蒙古襲来に関する異国降伏祈禱との関係が想定される。

長崎県独自の中世石塔である西彼杵半島産の緑色片岩製塔も、この時期から確実に制作され建塔されている。東彼杵郡川棚町の永仁五年（一二九七）銘五輪塔はじめ佐賀県嬉野市にある「弘安九年」（一二八六）銘板碑も共に緑色片岩製である。

この第二波の造立傾向も、九州全域で認められる。佐賀県では、太良町の竹崎観世音寺で二基の層塔はじめ数基分の五輪塔や宝塔など、また同じ太良町の里では諏訪神社五輪塔などが鎌倉時代後期の制作と考えられる。武雄市富岡町八並では約三メートルに及ぶ角宝塔が建ち、また吉野ヶ里町の脊振山靈仙寺跡では建治二年（一二七六）銘の層塔（現修学院に保存）や鎌倉時代後半頃の宝塔が確認される。

大分県では、この鎌倉時代後期に国東塔が現れ、最古銘の岩戸寺国東塔には弘安六年（一二八三）の紀年銘が陰刻されている。また臼杵市深田の深田宝篋印塔は総高が四メートルを超える巨大宝篋印塔であるが、これも鎌倉時代後期の制作といわれている(9)。

熊本県山鹿市の藤井八幡宮宝塔は、岩戸寺国東塔と同じように弘安六年の銘をもち、しかも同じく「如法経之塔」として建塔されている。熊本市野田町の大慈寺十三重石塔はその形態より鎌倉時代後期の制作と考えられるが、石材が花崗岩であり、しかも彫出の仕方から関西方面で制作され搬入された可能性が高い。

鹿児島県日置市の来迎寺址三重石塔は、初層塔身が長足の角柱となった変形塔で他に事例のないものであるが、その柱体の四面に種子（梵字）と「文永十二年」（一二七五）の銘が陰刻されている(10)。そのほか、宮崎県や福岡県などでも鎌倉時代後期の石塔が確認される。

前記した事例は九州各県における著名な石塔を挙げたままで、鎌倉時代後期の石塔は各地域で多数確認される。こ

の時期の形態上の特徴として、その大きさがあげられる。特に巨大石塔と呼ばれる大型石塔はほぼこの時期に集中しており、そこに何らかの共通した歴史的背景が想定されるのだが、恐らく文永・弘安の役という二度にわたる未曾有の国難・蒙古襲来に対する何らかの時代的刺戟が関与していたのではないかとと思われる。また、この時期に「逆修」塔が建塔されてくることは注目すべきことである。旧大村藩域にあつては永仁五年（一二九七）銘の川棚緑色片岩製五輪塔はじめ、佐賀県嬉野町の永仁九年銘緑色片岩製板碑などが挙げられる。この「逆修」塔が何故鎌倉時代後期に登場するのか断定的なことは言えないが、これも蒙古襲来による未曾有の政治的社会的混乱がその背景にあつたのではないかと考えている。

ところで、この第一期と第二期が確認される霊山の一つに、佐賀県と福岡県にまたがる脊振山がある。ここの霊仙寺跡（佐賀県吉野ヶ里町）の発掘調査では坊跡・経塚・墓地その他が確認されている⁽¹⁾。ここでは青銅製経筒や陶製経筒など一六本以上が確認され、中には天永三年（一一二二）銘の滑石製経筒や康治元年（一一四二）銘の青銅製経筒も確認される。この十二世紀半ば頃の経塚造営は求菩提山、彦山、国東半島の諸山でも確認され、脊振山の経塚造営もそのような傾向の一端として位置づけられるものである。また報告書では、その造営の背景として「五来氏や中野氏が説かれるように、平安時代中期～後期にかけての時期、九州において、かなり普遍的な熊野信仰の普及が見られるとするなら、この時期の経塚造営流行の要因に、一つの解答を与えるものと言えないだろうか。」としている。ただ、この経塚造営を経て脊振山一山が最盛期を迎える時期は十三・十四世紀といわれている。この時期になると、脊振山霊仙寺跡では大型の宝塔と三重層塔（建治二年〔一二七六〕銘）が造立されており、その最盛期を示唆する遺品として貴重である。

初期石塔の第三のピークは、一三〇〇年代後半から一四〇〇年代前半にかけ、主に長崎県の島々に見られる中央形式塔の大量建塔である。北は青森県十三湊から南は鹿児島県坊津まで日本海から東シナ海沿いに大量に運ばれ建塔されているが、その代表的な遺跡が南松浦郡新上五島町日島（写真6-3）や対馬・平戸島などである。この島々だけで、



写真6-3 日引石塔群 (新上五島町)

現在までに約四五〇基分以上の中央形式塔が確認される。その中で大半（全体の約八五割）を占めるのが、若狭湾に面した福井県高浜町日引地区で制作された日引石塔である。この日引石塔のもつ最大の特徴は、主に南北朝後半から室町時代前期頃の一期間内に、日本海から東シナ海沿いに日本列島の南北に向かってほぼ同時期に大量に運ばれ建塔された点にある。しかも、その時代は、東アジア全域にあつては元帝国の崩壊に伴う激動の時期であり、日本列島にあつても新たな国家秩序作りのための混乱と再編の時期にあつた。海の民の活動は、そのような既存の秩序崩壊に伴う混乱の時期にこそ活発化して倭寇を発生させたが、そこに日引石塔の海運による大量搬入と建塔の真因があるように思われる。

以上述べてきたように、初期石塔の建塔には三つのピークが想定され、その背景に末法思想、蒙古襲来、倭寇というそれぞれに重大な時代的刺激が深く関与していたと考えられる。

（大石一久）

註

①

川勝政太郎『石造美術』（スズカケ出版部 一九三九）、川勝政太郎『日本石材工藝史』（綜芸社 一九五七）や川勝政太郎『新版石造美術』（誠文堂 一九八一）、また九州・山口にあつては多田隈豊秋『九州の石塔』上巻（西日本文化協会 一九七五）、多田隈豊秋『九州の石塔』下巻（西日本文化協会 一九七八）や望月友善『大分の石造美術』（木耳社 一九七五）、内田 伸『山口県の石造美術』（マツノ書店 一九八五）、内田 伸『山口県の金石文』（マツノ書店 一九九〇）、更に佐藤 誠『九州の石塔・調査資料集』（一九八九）などは、その代表的な刊行物であろう。

②

古川久雄『京都型』宝篋印塔と京都石工の動向をめぐって（私家版 一九九八）

③

全国で綠色片岩（結晶片岩）を石材とする地域は、西彼杵半島、秩父地方（埼玉県）、紀伊川沿い、吉野川沿い、請川地区（山口

県宇部市)などがある。ただし、滑石製品(石鍋など)を加えると、福岡県糟屋郡や大牟田市、飯塚市などでもその制作が認められる。

- (4) 大石一久「中世石塔類における長崎県の主な特徴について」(大村史談会編『大村史談』第四十二号 大村史談会 一九九二)、大石一久「中世・石造物にみられる石造文化圏の問題について」(松浦党研究連合会編『松浦党研究』第二十二号 松浦党研究連合会 一九九九)など。

- (5) 福井県立博物館編『石をめぐる歴史と文化―笈谷石とその周辺―』福井県立博物館第11回特別展(福井県立博物館 一九八九)

- (6) 御坊墓地(種子島)の五輪塔については、水輪には種子「バ」の四転が陰刻されているのに対し、地輪・火輪・風空輪にはそれぞれ「ア」「ラ」「カ」「キヤ」が四方に陰刻されている。また水輪の最大幅が三六・四センチメートルに対し火輪軒横幅は三四・五センチメートルと小さく、明らかに別物であることを示している。また、この御坊墓地塔について、吉井敏幸は「種子島の寺院について(後編)」(財団法人元興寺文化財研究所編『元興寺文化財研究』通巻50号(94年8月号) 財団法人元興寺文化財研究所 一九九四)の中で種子島が海上交通によって畿内文化を導入していた事例として紹介している。

- (7) 藤澤典彦「律と石」シンポジウム「叡尊・忍性と律宗系集団」実行委員会編『叡尊・忍性と律宗系集団』大和古中近研究会 二〇〇〇)

- (8) 鞍馬寺宝塔については、川勝政太郎「新版『石造美術』(誠文堂 一九八一) 九七頁

- (9) 日古塔の制作時期については、川勝政太郎・望月友善の説に従う。望月友善「大分の石造美術」木耳社 一九七五

- (10) 来迎寺址三重石塔については、多田隈豊秋「九州の石塔」下巻(西日本文化協会 一九七八) 三〇八頁

- (11) 東脊振村教育委員会編『靈仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集(東脊振村教育委員会 一九八〇)

参考文献

- 小川琢治「九州の石仏」(『國華』二九二・二九三 國華社 一九一四)
- 浜田耕作「豊後磨崖仏の研究」(京都帝国大学文学部考古学研究室編『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第九冊 京都帝国大学 一九二五)
- 田岡香逸「石造美術概説」(綜芸舎 一九六八)
- 田岡香逸「西摂津石屋の石造文化圏とその石大工」(尼崎市立地域研究史料館編『地域史研究』第十巻 尼崎市立地域研究史料館

第二節 石塔造立階層の変遷

この世に生を得た人間が現実の安寧や死後の往生などのために造塔を願う行為が一般的になってきたのは、特に鎌倉時代以降といわれている。その際、供養塔であれ墓塔であれ、経済的社会的に優位に立つものはその力に見合う大型のものを建塔し、石材も良質のもの、彫出技術も優れたものを求める。長い間造立に縁のなかった庶民層にその造立の条件が整えば、例え小型で簡素化されたものであっても求めて建塔するであろう。

一般に鎌倉・南北朝期の石塔類は大型ないし中型のものが大部分を占め、石質・彫出技術も優れたものが多い¹⁾。また、その遺跡数は限られている。それに対し室町期それも後期に降るに従い基数はより以上に増加するが、簡略化・画一化された、石造美術史的には退化を意味する小石塔が一地域に限っても数カ所で確認されてくるようになる。

このような表れ方は、中央(大和・山城)と地方更には各地域間で微妙に差異が認められる。そこに造立階層の問題が、その地方における階層分化、庶民層の成長、惣村の成立過程など、中世社会における諸問題を探る重要な課題の一つとして位置づけられるのである。

ところで、九州内における造立階層の表れ方は、博多など一部の中心的港市とそれ以外の地方で異なってくるが、旧大村藩域を含む長崎県にあっても本土部と国境をまたぐ島々とは明らかに造立階層に違いがみられる。ここでは長崎県本土部の造立階層について略述したいと思うが、ここで示した造立階層の傾向は博多を除く九州全域の傾向とほぼ一致するものと考えられる。

以下、各時代ごとにどのような階層の人々が石塔を建塔したのか略述するが、対象エリアは旧大村藩領域を軸にし

た長崎県域である。なお、詳細については大石一久「地方における中世石塔造立階層の問題について」(『史迹と美術』第572号所収)を参照していただきたい。

◆ 平安末・鎌倉・南北朝(一一〇〇年前後～一三〇〇年代後半)

造塔者は、中世有力寺院の高僧、有力名主層以上の限られた少数のクラスと考えられる。実際、造立者が限定されていることから基数は非常に少ない。平安末から鎌倉初期に想定される石造物は笠塔婆・単体仏・経筒などであり、素材はすべて滑石製品で末法思想などとの関係がうかがわれる。また、鎌倉時代後半から出現する石塔類は、有力者による造塔を裏付けるように、一般に大型塔で占められている。彫出技術は、地方色豊かな地元の石塔(緑色片岩製塔や安山岩製塔)については、初期の鎌倉期のもはまだ拙ない部分もあるが、鎌倉末期から南北朝更に室町前期になるにしたがい、次第に彫出内容は高度になつてくる傾向にある。ただ、室町期になると、次第に形態は形骸化・簡略化の傾向が表れてくるようになる。

更にこの時期の遺跡数は、限られた階層による造塔という点を裏付けるように、非常に限定される。一般的には、一地域で一カ所程度である。つまりこの早い時期の石塔類が確認される場所は、その地域にあつて中世における中心地またそれに近い範囲の場所を示していると考えられるため、中世における地域の社会的様相を知る上で非常に貴重な資料を得ることができる。この点からも、例えば残欠であれ、石塔類の文化財としての高い価値が出てくるのである。

なお、十四世紀から十五世紀代にかけて、主に五島(新上五島町日島など)・対馬・平戸島など国境をまたぐ島々では四五〇基分以上の中央形式塔(主に福井県高浜町の日引石塔)が集中的に建塔されている。同時期の本土部の基数とは比較にならないほどの大量建塔であるが、これらの造立者については階層や身分という概念で捉えるよりも、一時的な経済的盛況(倭寇)による造立という設定がより実態に近いように思われる。

二 室町前期（一四〇〇年代前半）

一部の地域で、複数の法名を刻んだ交名碑きょうなひつが確認されることから、階層分化の進展を背景に、造立階層が次第に拡大し、小名主層まで造塔に参加したと考えられる。この点は、遺跡数の拡大、更には石塔自体の小型化傾向、形態の形骸化という傾向とも符合する。

交名碑の一例として、文安四年（一四四七）銘の宝篋印塔（長崎県東彼杵町）がある。基礎だけの残欠であるが、良質の緑色片岩を石材とした横幅四一センチメートル・背高二三センチメートルの基礎で、その正面と両側面三面に紀年銘・造立の趣旨と同時に五五名の法名が列記されている。そのほか、長崎県内では六基分の交名碑が確認されるが、それらはすべて一四〇〇年代前半の約五〇年間に建塔されていることが分かる。

なお、長崎県内にあつて交名碑が多数（五基分）確認される地域は、東彼杵地区である。更に大村市萱瀬地区と佐世保市内、それに長与町でそれぞれ一点ずつ確認される。この交名碑の出現は、これまでの伝統的な有力名主層が分化・崩壊して各地域に小名主が成長・独立し、現在の村・郷に近づく地縁的な郷村制が成立していく過程を示していると思われる。

ただ、この伝統的有力名主層の分化という過程は県下全域に共通する傾向というよりも東彼杵などの一部の地域に限定された傾向のように思われる。そのため、この室町前期における造立階層は、確かに各地域に室町前期頃の石塔数が増加してくるが、ただそれまでの造立階層である中世有力寺院の高僧、有力名主層以上の限られた少数のクラスに入る階層がまだ主な造立階層であつたとすべきであり、この時期から一部の地域にあつて小名主層の造立への参加が認められるとすべきであろう。

三 室町中期から後期（一四〇〇年代半ば～一五〇〇年代末）

主に室町前期頃から表れてくる石塔造立階層の拡大は、室町の後期になればなるほど顕著になり、各地に成長して

くる小名主更には役士層クラスまでもが造立に参加したと考えられる。それが室町後期に見られる小型で簡略化・画一化された粗雑な石塔類を大量に建塔した背景をなすものと思われる。また造立階層の拡大を背景に、この時期の遺跡数・基数はより拡大し、一地域に限っても数カ所で確認されてくるようになる。

ただ、この時代であっても、造立者が上位階層のものであれば当然良質の石材を使用した大型塔を建塔している。その好例が、大村家一六代大村純伊の墓塔である「中庵」塔である。この「中庵」塔は、緑色片岩というよりも蛇紋岩に近い硬質の石材を使用した五輪塔（地輪だけの残欠、横幅五三センチ・背高二〇センチ）で、上端には反花（かたはな）で、表面は研ぎ出しを入れて丁寧な造りとなっている。「大永三年」（一五三三）の紀年銘をもつが、この「中庵」塔は、室町期特に政治的不安定を増す室町中期以降になると、以前の高僧などに代わって世俗的な有力者層が大型造立の主な担い手になってきたことを示すものとしても貴重である。

ところで、中世の長崎県において、明らかに庶民層による造立と考えられる仏塔（五輪塔や宝篋印塔など）は今のところ一基も確認されていない。では、いつ頃から庶民層は本格的に墓塔造立に参加できたのかといえば、大体、江戸時代の十七世紀後半以降ではないかと考えられる。一般庶民層が寺院に自家の葬祭を永続的に委託する習慣、つまり檀家制度が本格的に持ち込まれたのは、恐らく一般に言われる「実にかの切支丹禁圧の一方法として用いられた寺請制度の普及以後」⁽²⁾と考えられる。このことから、一般庶民層による整形された石塔の建塔が始まったのは、多分に寺請制度普及以後の十七世紀後半特に元禄年間以降と考えられ、それを示す石塔（立石墓塔）も実際に確認される。ただ、博多では、南北朝期康永三年（一三四四）銘の自然石塔婆（福岡市水茶屋）に「弥五郎」や「又四郎」など二七人の名が連記しており、その名字なしの名から考えて九州全域において最も早く庶民層が造立に参加したものと考えられる⁽³⁾。博多の開明度の早さがうかがわれる貴重な石塔婆である。

なお、江戸時代前半期の石塔類は、いわゆる今日の墓塔の一般的な形態をなす立石墓塔が主流を占めるようになるが、一方で五輪塔や宝篋印塔も継続して建塔される。ただ江戸期の五輪塔については、中世以来の形態を踏襲したも

のと、江戸期に新たに登場する独特の形態をしたものに大きく分けられる。

前者は、大部分が地域の石材(主に砂岩)を使用し、専門石工でない素人によると思われるほどの粗雑な五輪塔となっている。形態上は、全体に大型であるが、火輪の大きさに対して風・空輪が大きく制作され、しかもその形状は、本来の風・空輪の形状を逸脱したものとなっている。

後者の江戸期に新たに登場する五輪塔は、前者以上に大型であり、いわゆる有耳五輪塔と呼ばれるものである。火輪の四隅が上方に大きく反り上がり、風・空輪も異様に大きく造られるものである。この有耳五輪塔は、全体の塔形は本来の五輪塔の形態から大きく逸脱したものであるが、ただその制作技術が高いところから明らかに専門石工による制作であり、石材も良質のもの(当地にあつては安山岩が主)が使用されている。

なお、十六世紀末から主に十七世紀前期にかけて登場するキリシタン墓碑は、中世から近世の狭間、その一時期だけ公に建碑されてくる墓碑であるが、このキリシタン墓碑がその後の日本の墓石形態に与えた影響には多大なものがあったと思われる。個別的なキリシタン墓碑については第三卷「近世編」で詳述するが、横に伏せる伏碑ふせびを特徴とするキリシタン墓碑は、旧来の五輪塔や宝篋印塔など立塔とは全く異なる新規な墓碑であったし、その性格も単なるモニュメントとしての記念碑的なものであった。最終的に死者の霊が宿るといふような日本伝統の墓塔の意味づけとは明らかに異質であった。この新規なキリシタン墓碑の出現を幕府は当然意識しており、キリシタン禁制以降、その取締り対策の一環として伏碑のキリシタン墓碑とは真逆に「墓石は立てて戒名を刻むべし」と規制した。つまり幕府は、墓石は立塔で戒名を刻むべしと義務化することにより、キリシタン撲滅対策の一環としたのである。しかも、死後の世界まで規制を加えることで、結果的に現在の墓石形態まで規制することになった。全国津々浦々に至るまで同じ立石墓塔で占められた近世以降の墓石は、そういう意味で宗敎色というよりも政治色が濃い性格を持っているのである。

(大石一久)

(1) 中世の石塔は、江戸期以降の立石墓塔と比較した場合、基本的に小さい。ただ、鎌倉・南北朝期のものは中世石塔としては大型である。この大型・中型・小型という表現は中世の各石造文化圏ごとに異なるが、長崎県の緑色片岩製塔その中の五輪塔の地輪を例にとつてみると、領主(大村氏)クラスで横幅が五〇センチ内外、名主クラスで横幅が四〇センチ内外、それ以下のクラス(役士層)が三〇センチ内外の横幅が一般的な傾向となっている。この西彼杵半島産の緑色片岩製は、もともとから大型の石材が採れないという地質上の問題があり、大きな石材が採れる凝灰岩製塔や安山岩製塔に比べ全体に小さい。

(2) 豊田 武『宗教制度史』豊田武著作集第5巻(吉川弘文館 一九八二) 一一六頁

(3) 川勝政太郎「中世における石塔造立階級の研究」(史迹美術同放会編『史迹と美術』49(10) 史迹美術同放会 一九七九)

◆コラム◆

一休さんと茶臼

茶臼といっても、果たしてどんな白なのだろうかと思われる方が多いと思うが、要するに乾燥させた茶葉を粉にする石臼で、茶の湯に欠かすことのできないものである。形は一般の石臼とはやや異なり小型であるが、皿状の小白と円筒形の上白の二石からなることは通常のとおりである。上白の両側には挽き手差し込みの穴を彫り、その穴の周りには、普通、重ね角形の文様や蓮華紋などを彫り出している。時代によって形があまり変化しないために、形態からその制作年代を割り出すことは困難である。

喫茶の起源は、中国にあるといわれている。日本へは仏教の伝来とともに受け入れられたとい

われているが、ただ粉末タイプの茶、いわゆる抹茶が一般に普及するようになったのは、鎌倉時代に臨済宗の祖・栄西が中国より茶種を持ち帰ってきたことに始まるといわれている。最初は医薬の一種として用いられたが、その後禅宗の僧侶と武士の生活に結びつき、十四世紀以降になると全国に普及、今でも有名な宇治の茶が本茶として名をはせてきたという(熊倉功夫『茶の湯』わび茶の心とかたち(教育社歴史新書) 教育社 一九七七)。

抹茶の普及にあわせ、茶葉を粉にする道具も変わってきた。栄西が抹茶を伝えた頃は、薬研と呼ばれる薬種を粉にする器具を使用していたが、その後中国から伝来したといわれる茶臼が国産化されるようになり、抹茶の道具として一般化した。現在確認される最古の茶臼は、貞和五年(一二四九)銘をもつ高知市の吸江寺茶臼である。

ところで、とんちで有名な一休和尚の著「骸骨」(十五世紀)の中に「なきあとの／かたみに石がなるならば／五輪の台に／ちやうすきれかし」とある。これは、茶臼をひかせる位の高い僧が、肝心な修行をおろそかにして茶の湯のみに現を抜かし、亡くなった後もその愛用の茶臼の下臼を五輪塔の地輪部分に使用し、生前の世俗的な豊かさを誇示しているという一休の風刺歌である。世俗に埋没した僧侶に対する痛烈な批判が込められている。実際、彼の生きた室町時代において茶臼は大変に貴重で、有力武士層や高僧など一部の階層しか持てなかった。

さて長崎県内でも、時々、集積された中世の石塔群の中から、茶臼の残欠が出てくる。これらのはほとんどは、十六世紀の半ばから後半頃に制作された五輪塔などと一緒に出てくる。このことから、当地でも茶臼は、一休和尚のいう「五輪の台」に使用されていたものと思われる。

中央、地方を問わず、亡くなった後も生前の世俗的な豊かさを茶臼に託したことが推察されることから、当時茶の湯が、いかに上層階級の嗜みで、世俗的な裕福さを示すバロメーターとして

あったか理解されると思われる。現代では、この茶臼に相当するものが何であるのか分からないが、このような風潮は、今も昔も変わらないような気がする。

なお、山城跡などから出てくる茶臼の中に、白の目が端まで完全に刻まれているものがある。

これは、多分に黒色火薬づくりのため木炭などを粉にする白として使用された可能性がある。茶臼は、一般の白に比べ、より細かい粒子の粉にひくことができる。このため、時として黒色火薬づくりの軍事に転用されるのである。

茶臼の遺品は、抹茶の風習が、長崎県内にあっても十六世紀の半ば以降には確実にひろまっていたことを示すと同時に、当時の世相の一端を今に伝える貴重な遺品でもある。



写真6-4 川棚・極楽寺跡
五輪塔(地輪に茶臼下臼を転用)

(大石久)

第三節 石塔類からみた中世の大村

五輪塔や宝篋印塔など中世を代表する石塔類は、いうまでもなく仏教の所産である。そのため石塔類を通して中世宗教の様相や、造立階層の分野から中世社会のあり方が理解されてくる。

旧大村藩域における中世・石造物は、当地における複雑かつ不透明な中世史を反映してか、各遺跡ごとに微妙な差異を示している。種目は、宝塔、五輪塔それに宝篋印塔を主体とする状況は他地域とほぼ同じであるが、ただ、その

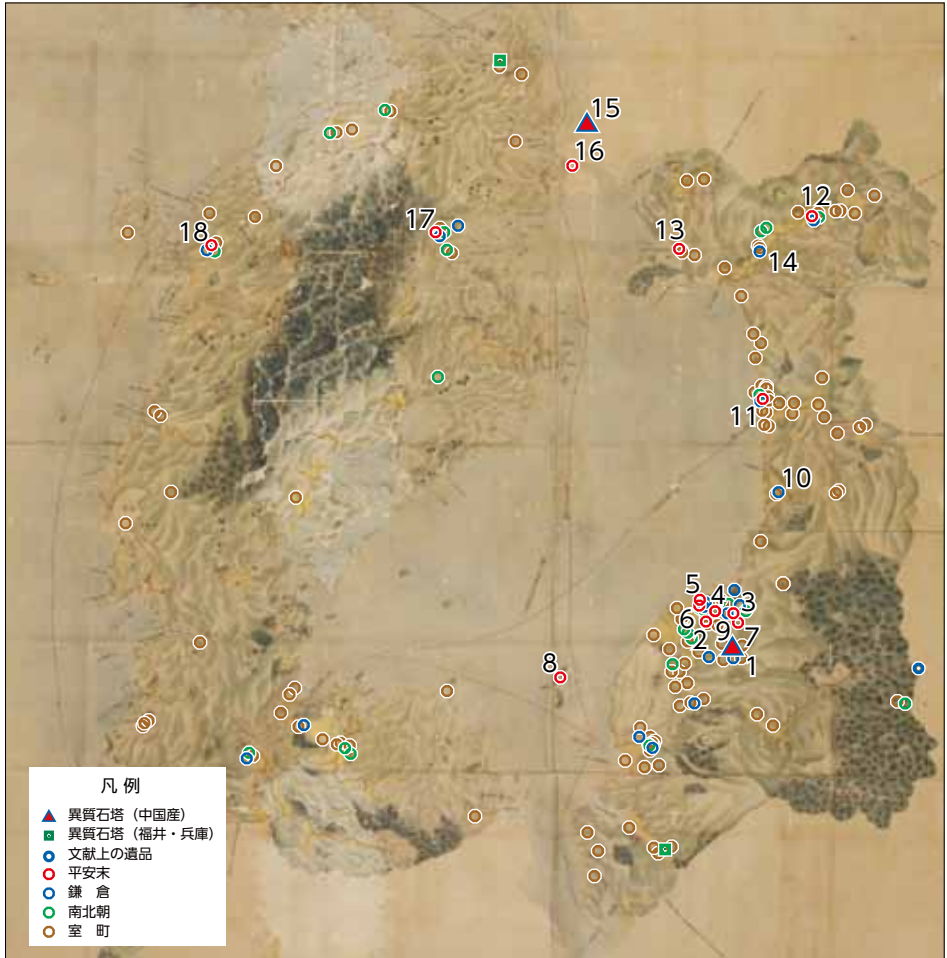


図6-1 (遺跡地図 I)「肥前国彼杵郡之内大村鎮絵図扣(正保国絵図 肥前国)」

(作成：長瀬雅彦)

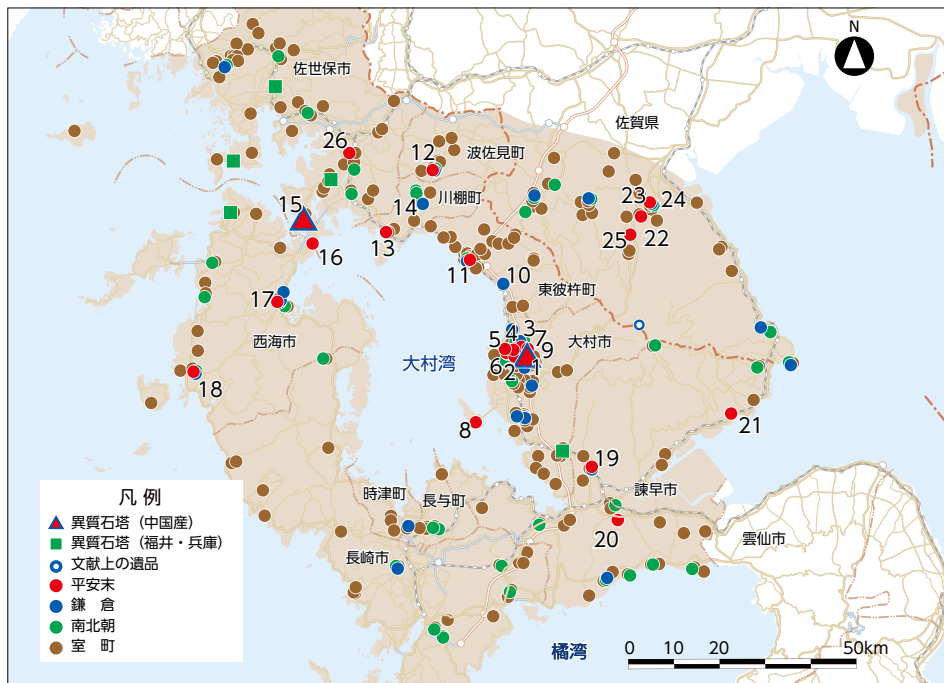


図6-2 〔遺跡地図Ⅱ〕現代地図

(作成：長瀬雅彦)

あり方は周辺の諫早市や佐世保市、大村氏の本貫地といわれる鹿島市などはやや異なった様相を呈している。特に異質石塔の存在は中世における大村湾の広範囲な交流を物語っており、当地がもつ豊かな歴史を示唆している。

この節では、最初に遺跡(遺品)分布から見た全体観とその特徴を述べ、次に時系列に具体的事例を挙げて中世の旧大村藩域の様相を略述する。

一 分布からみた全体観

ここでは、現在までに確認した主な石塔群(単品を含む)の所在地を図6-1「遺跡地図Ⅰ」として、「肥前国彼杵郡之内大村領絵図扣(正保国絵図 肥前国)」(十七世紀半ば(正保年中)、長崎歴史文化博物館所蔵)と図6-2(遺跡地図Ⅱ)として、現代地図に落とし、そこから見える中世・大村の様相を述べる。範囲は「正保国絵図」の旧大村藩域を基本としな

がらも、現代地図には長崎市、諫早市、佐世保市南部（主に佐世保湾以南）、それに佐賀県側の鹿島市、嬉野市、太良町なども範囲に加え、大村湾、外海、佐世保湾、橘湾、有明海にかけての範囲で検討する。

なお、紙面の都合上、各遺跡名や位置、基数等については割愛するが、主な遺跡・遺品については、本文中で地図上のドット番号を付記して紹介する。以下、箇所書きで分布から見た全体観とその特徴を略述する。

■ 一、河川沿いに発達した後背地に集中建塔

中世・石塔類の所在地は、山岳に建塔された一部を例外として、基本的には河川沿いに開けた后背地を前提に集中建塔されている。具体的にみれば、地方では現大村市の郡川や大上戸川沿い、東彼杵町の彼杵川沿い、川棚町や波佐見町の川棚川沿い、向地では長与川、時津川沿い、外海では多以良川沿いなどであり、各河川沿いに開けた后背地を望む高台が主たる建塔地となっている。その最大の建塔地は現大村市の郡川周辺であることは一目瞭然である。この点は、これら河川沿いの在地に鎌倉期以降有力な

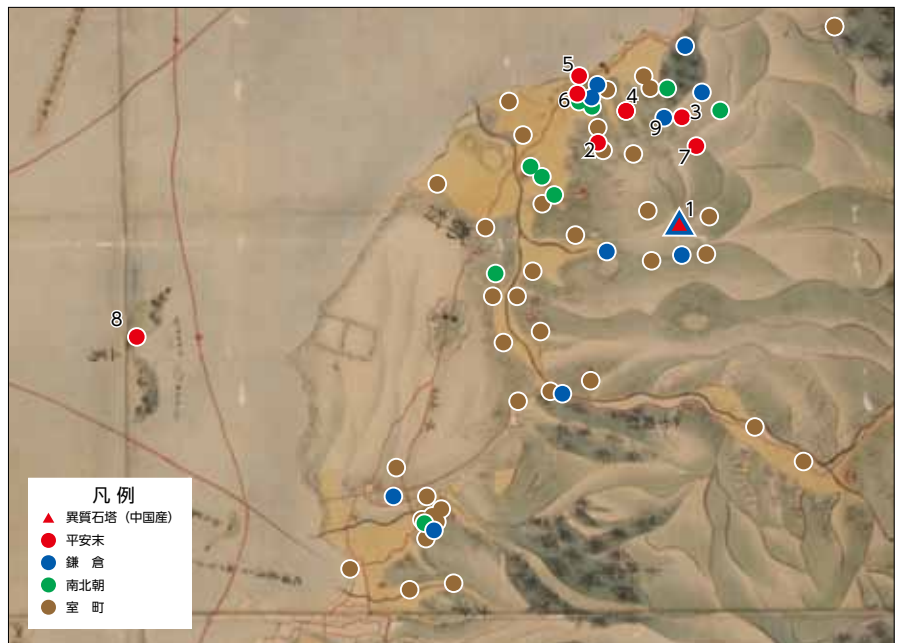


図6-3 「肥前国彼杵郡之内大村鎮絵図扣(正保国絵図 肥前国)」(現大村市内部分) (作成：長瀬雅彦)

石塔造立階層が存在したことを示しており、この有力層を軸に当地が豊かな後背地として形成されてきたことを示唆している。また、「正保国絵図」の分布図を引き合いに出すまでもなく、鎌倉期以降の集中的建塔地はほぼ近世以降の集住地へとつながっていくことが理解される。

ただ、すべての建塔地が河川沿いの低地であるとは限らない。河川沿い以外の建塔地で山頂（経ヶ岳の経筒など）や小島（箕島の経筒、川棚町小串の笠塔婆など）の場合はその遺物から宗教的意味合いをもって建塔されたと考えられるが、河川を伴わない丘陵地の場合は旧山城跡周辺（内海の八木原城跡周辺など）などが相当し、政治的意味合いを含んだ在地有力者による建塔が考えられる。

■二・建塔地の偏在性

建塔地の密度は、地方において濃く、外海・内海の西彼杵半島では薄い。いうまでもなく中世における石塔造立階層は非常に限定されており、時代を遡るほど在地の有力層に限られる。この点から考えると、大村を中心とした地方の開明度が西彼杵半島よりも非常に高く、その地形上の利点が有力勢力の形成と建塔を促したものと考えられる。特に郡川周辺を中心とした現大村地域の建塔は際立っており、諫早市や鹿島市など周辺地域と比較しても群を抜いている。しかも鎌倉期以降の早い段階から室町時代まで継続して建塔されており、豊かな後背地と大村湾のもつ活発な海上交流を背景に石塔造立階層（有力階層）が時代を通じて形成されてきたことを示唆している。この点は、西肥前全域から見ても特筆すべき中世・大村の特徴といえることができる。

■三・大村湾の歴史的役割

大村湾は、北部の針尾瀬戸と早岐瀬戸の二カ所のみで佐世保湾に通じ東シナ海につながっており、「閉鎖性」に「超」が付くほどの内海であるという¹⁾。

ただ大村湾は、地形上は閉鎖的な内海であるかもしれないが、歴史上は外洋とつながった非常に開放的な内海であったと考えられる。特に大村湾奥部の現諫早市に食い込んだ津水湾は、中世にあっては小船越を越えて有明海に通じるも

う一つの海路の役割を果たしたものと思われる。現在、半造川側に立つ「西郷の板碑」(写真6-5 遺跡番号20)はその象徴的事例である。

この板碑は高さ約二メートル、最大横幅一・四四メートルの大型自然石板碑で、建久元年(一一九〇)の銘をもつ。碑面中央に「大日如来」(アーク)を刻み、その脇侍として「不動明王」(カーン)と「毘沙門天」(バイ)を配列する形式は非常に特殊で、平安時代以降の天台修験との関係が考えられる。全国的にも貴重な優品である。問題は、この板碑が立つ場所とその建碑趣旨である。板碑

が立つ場所は慈眼寺跡といわれ、半造川にかかる亀山橋前方、亀山住宅団地の裏側に当たり、一山越えた本明川沿いには、中世以来の城跡である高城や温泉四面宮の一社諫早神社などがある。また、西側に目を向けると今も地名として残る小船越の地を経て大村湾に通じる。しかもこの板碑が造立された背景には、大型の非常に優れた自然石板碑であることを考えて、何らかの経済的活況を呈した環境があったことが想定される。

以上の各点から考えると、この平安末の紀年銘を持つ「西郷の板碑」は、かつてこの地一帯が小船越の地を経て大村湾と有明海を結ぶ通行の要所に当たり、その活況を背景に建碑されたのではないかと考えられる。であれば、少なくとも物流面において、大村湾と有明海は板碑が立つ地域一帯を軸にして結ばれていた可能性が高く、その伝統は本明川沿いに立つ貞和七年(一一三五)銘の「慶巖寺の名号石」(諫早市城見町慶巖寺)に受け継がれていったものと考えられる。

次に大村湾がもつ開かれた内海に注目したい。大村湾は、学術的に「超閉鎖性海域」といわれるそうだが、その用語からイメージされる大村湾は非常に暗いイメージになってしまう。このイメージは歴史的には全く当てはまらないといっても過言ではない。

大村湾沿いでは多くの貿易陶磁器(大村市寿古遺跡、東彼岸町白井川遺跡、岡遺跡など)が確認され東シナ海を通じて中国大陸などとの交流を裏付けている。特に白井川遺跡から出土した平安後期の「個」墨書銘白磁碗は貴重で、



写真6-5 諫早市・西郷の板碑

「中国船頭・商人の渡来・居住」の可能性まで指摘されている(3)。

石造関係でも幾つか広範囲での交渉を裏付ける異質石塔が確認される。その中でも薩摩塔は貴重な遺品である。この薩摩塔については次項の「時系列上の特異性」の項で詳述するが、大村市内の龍福寺跡で薩摩塔と呼ばれる特殊塔の塔身(残欠 遺跡番号1)が確認される。石材は中国浙江省寧波産の梅園石で、制作時期は十二〜十三世紀頃に想定される(4)。制作地は、現段階では寧波と限定はできないが、中国の華南から華南にかけての沿岸部である可能性が非常に高い。また、同じ梅園石と考えられる遺品(一石作りの笠と相輪残欠)が針尾瀬戸に面した針尾城(小鯛城)跡周辺からも出ている。これが薩摩塔の部材なのかどうか断定はできないが、龍福寺跡薩摩塔とほぼ同時期の制作で中国から搬入された可能性がある。これら中国大陸からの数多くの遺品を考えると、中世を通じた中国との活発な海上交流が大村湾まで伸び、その海路の湾内におけるセンター的位置にあったのが現大村市の郡川周辺と東彼杵町彼杵川河口周辺であったと考えられる。この点は、一時的な活況を呈する佐世保湾周辺の性格とは対照な性格が読み取れる。このように湾内の地方特に大村・郡川周辺における中世・石塔の集中的建塔は、豊かな後背地と大村湾がもつ開放的な内海として展開された貿易センター的な役割がその主たる背景にあったものと思われる。

■四. 平安後期の建塔地と鎌倉期以降の集中的建塔地

平安後期の分布地は外洋に面した外海ではなく大村湾内に限定される。ここで対象とする遺品は、主に宗教的所産と位置づけられる経筒や単体仏、笠塔婆(かさたば)であり、すべて西彼杵半島産の滑石を素材としたものである。

西彼杵半島の外海で鎌倉時代まで廻れる遺品は、西海市大瀬戸町東楽寺跡の滑石製五輪塔水輪(現在、西海市大瀬戸歴史民俗資料館蔵 遺跡番号18)であるが、平安期まで廻れる石塔類は未だ確認されていない。それに対し、平安後期(主に一一〇〇年代)まで廻れる遺品は大村湾内で確認される。主な遺品を挙げれば、まず大村湾開口部に当たる針尾瀬戸を望む明星鼻で文治五年(一一八九)銘の経筒(現祇園寺保管 写真6-6 遺跡番号16)が確認され、その針尾瀬戸を抜けて内海に入ると箕島(現長崎空港 遺跡番号8)で文治元年(一一八五)銘の経筒(写真6-7)が出



写真6-7 大村・箕島出土経筒



写真6-6 明星ガ鼻経筒



写真6-8 川棚・滑石製笠塔婆筒

保管 遺跡番号21)でも確認される。

経筒で貴重な遺品といえは、杵岐島の鉢形山から出土した延久三年(一〇七一)銘の石造弥勒如来坐像(滑石製 国指定重要文化財)である。現在は奈良国立博物館に保管されているが、その彫出内容といい、毛彫りされた願文といい、文化財としての価値は一級である。この経筒については次項で詳述する。

次に、その笠塔婆か宝塔の宝珠に当たる遺品は、はなまき 勿木城跡(西海市西彼町八木原 遺跡番号17)や東彼杵町の岡遺跡、本明川上流域に当たる諫早市本野町の年神社、更に鹿島市などでも確認される。

土している。また大村市内の弥勒寺町の石堂屋敷(遺跡番号2)などでも出土しており、佐世保湾内では早岐瀬戸に位置する三島山(遺跡番号26)で宋代湖州鏡や青白磁を含む経筒が発掘されている(5)。鹿島市では岩屋観音(遺跡番号22)などでも確認される。また、笠塔婆の塔身に当たる滑石製遺品は、湾内では川棚町小串郷(写真6-8 遺跡番号13)、波佐見町東前寺(遺跡番号12)などで確認され、有明海沿いの諫早市小長井町河内名(現在は称念寺で

平安後期に比定される滑石製の単体仏は、背高二三〇〜二八センチメートル、最大横幅一〇〇〜一五センチメートル、厚さ五〇〜六センチメートルの半肉彫り坐像の小石仏である。この単体仏は、長崎県内では大村市の郡川周辺のみで確認される。特に弥勒寺町の石堂屋敷や福重町石走地区などで計八体の単体仏が確認され、しかも石堂屋敷では文治五年銘の明星ガ鼻経筒と同形態の経筒も出土している。同じ滑石製の単体仏は佐賀県脊振山霊仙寺跡で三体、佐賀市大和町の与止日女神社で一体確認され、より精巧な丸彫りの単体仏は鹿島市岩屋山などでも確認される。

これら平安後期に想定される滑石製遺品は、基本的に末法思想に伴う埋経行為に関係するものと思われる。ただ、埋経場所が山頂などではなく小島や海際であることを考慮すれば海上祈願に関係深い場所を選定して設けた可能性もある。

ところで、平安後期の遺品所在地域は、鎌倉期以降の石塔類が継続して建塔されていく地域と平安後期だけの単発で終えている地域に大別される。前者の鎌倉期以降も継続して建塔される遺跡は、大村市内では郡七山十坊に含まれる東光寺跡（遺跡番号16）があり、その近くで滑石製の単体仏が確認されている。また、弥勒寺町の石堂屋敷は平安後期に想定される経筒や単体仏からやや空白期間において室町時代から石塔類が建塔されてくる。東彼杵町では、岡遺跡とその周辺で平安後期の宝珠に続いて遅くとも南北朝期には石塔類が建塔されている。波佐見町の東前寺では、平安後期の笠塔婆（塔身）に続いて鎌倉期の宝塔が確認され、継続して室町後期まで建塔されている。西彼杵半島では勿木城跡（西海市）とその周辺で平安後期から鎌倉期以降の石塔群が継続して建塔され、西海市大瀬戸町の東栗寺跡でも平安末まで遡れる五輪塔以降継続して室町後期まで建塔されている。

それに対し平安後期の遺品のみで終えている遺跡は明星ガ鼻（佐世保市）や箕島（大村市）、川棚町小串郷がある。これらの遺跡は、平安後期の一時期、湾内における交流上、位置的に重要な場所だったものと思われる。

ただ、鎌倉期になって新たに建塔地として登場してくる場所もある。大村市内では郡川周辺の延命寺跡（遺跡番号5）、冷泉寺跡、大上戸川周辺の富松神社とその周辺である。東彼杵町内では清心寺跡（遺跡番号10）や大門跡（遺跡

番号11)、大安全寺跡など、川棚町内では七浄寺跡(河原城跡 遺跡番号14)岩屋権現、まいやまなど、波佐見町内では金谷神社などが挙げられる。西彼杵半島の内海では西海市西彼町大串郷墓地などがある。

これら鎌倉期以降に新たに登場してくる建塔地は、各在地勢力に関わる中世寺院など宗教施設との関係から形成されたものと思われる。

◆時系列上の特異性

旧大村藩領域で確認される石造物は、各時代ごとに特徴ある建塔状況を見せている。この項では、石造物から見える中世・大村の特異性を時系列に述べていく。

■一・平安後期から鎌倉初期(一一〇〇年代～二〇〇年代前半)

西彼杵半島産の滑石や緑色片岩を素材とした遺品のなかで仏教文化の伝播に伴って制作されてくる石製品は、今のところ滑石製経筒がその初源である。ただ、経筒制作の前提をなすものとして滑石製の紡錘車イトリや石鍋などの生活用具が想定される。なかでも石鍋は平安時代の十世紀頃から鎌倉時代をピークにして中世末まで制作されており、西海市西海町はじめ同大瀬戸町(ホゲツト遺跡)など西彼杵半島全域にその制作所跡が確認されている。「筑紫國船越莊未進勘文」(『平安遺文』)によれば「石鍋四個に牛一頭」と交換されたというから当時相当に高価なものであったと思われる。またその分布範囲は北は東北から南は九州沖縄までという広範囲であり、西彼杵半島を起点とする当時の海上交易がいかにエネルギーシユに展開されていたかをよく示している。ただ、その活動を実際に担っていた人々がどういう立場の人たちだったのか具体的に分かっていないが、勿木城跡(西海市西彼町)の五輪塔地輪の銘文から「海夫」の存在が知られている。そのため、この海夫を担い手とする海上交易で石鍋の物流が行われた可能性が想定されるが、この点については第三節第二項四で述べる。

なお、この滑石製石鍋の製作地について、稼動率は西彼杵半島までは高くはないとしても、山口県宇部市請川地区や

福岡県糟屋郡でも確認されており、石鍋以降の滑石製経筒や石仏などの問題を考える上でも、両地区での滑石製品と西彼杵半島産との比較・検討が今後望まれる。また和歌山県下にあっても石鍋制作の可能性が指摘されている(6)。

ところで、この石鍋の制作技法は、その後の経筒や石塔類など仏教文化に伴う遺品の制作に継承されていたものと考えられる。中世石塔類に見られる鑿^{のみ}面幅は一・二―一・三センチ内外であるが、この数値は石鍋のそれとほぼ同値を示しており技法上の継承があったことを裏付けている。特に平安後期から鎌倉初期に比定される滑石製経筒・単体仏・笠塔婆・宝塔などの制作には石鍋制作の技法が認められる。

〔滑石製経筒〕

湾内で確認される経筒で、この時期の紀年銘をもった遺品といえは文治元年(一一八五)墨書銘大村箕島経筒(現長崎空港 写真6-7参照)と文治五年(一一八九)銘明星ガ鼻経筒(針尾・現祇園寺保管 写真6-6参照)である。特に明星ガ鼻経筒には紀年銘と同時に「大勸進〔僧〕永金」と陰刻されている。この「永金」なる人物については資料的に全く不明であるが、この経筒が埋納された十二世紀は、九州一円に熊野修験の活動が活発化した時代といわれている(7)。また実際に大村・郡川周辺にあつても熊野修験の痕跡が認められることを考慮すると、この文治元年銘明星ガ鼻経筒に関する埋経行為も熊野修験関係者(大勸進〔僧〕永金)による可能性が高いように思われる(8)。

ところで、壹岐島鉢形山より出土した滑石製の弥勒如来坐像(写真6-9)は、西肥前の埋経行為を考える上で重要な示唆を与える特異な遺品である。経塚からの出土は延宝五年(一六八二)で、延宝九年には再度埋め直したことが「石製彌勒如来埋納碑」に銘文として残る。現在は奈良国立博物館に保管されているが、ほぼ完形で像高は五四・三センチを計る。



写真6-9 滑石製弥勒如来坐像

この経筒の特異性はその形状にある。経筒といえは筒状の形態が一般的だが、この経筒は丸彫りの如来形坐像で、像の底部を長方形形状に穿って像自体を経筒としている。他に類例のない特異な石仏経筒で、像様は通肩に衣をまとして法界定印の手印を結び、別石の同じ滑石製蓮台上に結跏趺坐する。滑石は西彼杵半島産と考えられ、採石の制約上、膝などの張り出しが短く不安定な造作となっている。

銘文は右肩から胴背面にかけて願文が毛彫りされているが、長文のため要約する。

延久三年 月 日

当時國司正六位佐伯良孝／正六位大掾若江糸用／願主天台僧教因／佛師肥後講師慶因／佛師 頼圓／日本國壹岐嶋物部郷鉢形嶺／奉納置如法妙法蓮華經奉籠腹内／經者釋迦滅 度二千年後始自延久二年十月／一日十七日書 畢十一月十三日供養佛者／同二年十月十五日造畢／（以下略）

この願文によれば、延久三年に壹岐国の國司佐伯良孝の治下、若江糸用が天台僧教因を願主として、肥後の仏師慶因に造らせ、書写した法華經を像内に納め埋経した様相が書かれている。蓮台上面には弥陀の九品往生印が刻まれ、九輪中には上品上生から下品下生までの各印と願主・結縁者名が陰刻されている。

このように埋経に関わる経容器として滑石製の弥勒像自体を経筒にした類例は他になく、延久三年銘という時代性を含め、埋納思想の実態究明に貴重な資料を提供している。また、法華教・弥勒菩薩・阿弥陀如来の複合した信仰形態を示唆するものとしても、その学術的価値は高い。

この石造弥勒如来坐像経筒は、「日本國壹岐嶋」という願文からも、埋経地・壹岐島がもつ日本国の最前線という領土意識が読み取れ、特に一〇一九年、対馬、壹岐更に北九州を襲った「刀伊の入寇」という侵犯事件が「日本國壹岐嶋」の表現につながったものと解釈される^⑨。この危機意識は、十三世紀後半の蒙古襲来時における異国降伏意識と同じように、恐らく当時の西肥前全体に共通した意識であったものと思われる。

大村湾内にあつても、経筒以外に滑石製の单体仏や笠塔婆、宝塔などが確認され、これらも埋経思想に関わる遺品

であろうことは先述したとおりであるが、この一時期に集中的に埋経に関わる作善行為が行われていることは、単に末法思想の伝播だけではなく、そこに政治的社会的な混乱や不安を引き起こす何らかの時代の刺激があったものと思われる。だからこそ、これまで石鍋など生活用具を制作していた西彼杵半島で仏教思想を背景にした経塚関係の造作が始まったのではないかと思われる。しかも、このような作善行為を実際に推し進めたのは、弥勒如来坐像経筒の「願主天台僧教因」の銘文にみられる天台系の熊野修験関係者の可能性がある。壹岐島の長栄寺大御堂で発見された承元三年（一一〇九）銘玉塔（現在、壹岐市立一支国博物館蔵）は県内最古の紀年銘仏塔であるが、この宝塔などは経筒埋納地の地上標識的役割を担ったものであり、埋経思想の伝播に伴って西彼杵半島で仏塔制作が始まったことを示唆している。

なお、西肥前の場合、埋納場所が岬の突端（明星ガ鼻など）とか小島（箕島など）など海際がほとんどである。通常、末法思想に伴う埋経場所は霊山の山頂や標高のある山腹であるのが一般的だが、松浦市を含めた西肥前では一部の例外（永仁二年（一一九四）銘経筒が多良山系の主峰・経ヶ岳山頂より江戸期に発見）を除き海際の低地に築かれている。恐らくこの点も、海に向こうからやってくる災いを防御するための海上祈願に関係深い場所、ひいては海上交流にとって重大な意味を持った場所に埋経施設が形成されたのではないかと思われる。

■二、薩摩塔の分布とその背景

市内立福寺町の龍福寺跡に半壊状態の柱状石（写真6-10）がある。部材としては六地藏塔の龕部を思わすが、辛うじて残った側面二面には四天王像の二尊が半肉彫りで表現されており、角度をもった残部状態から本来の形状は六角柱状をなしていたことが分かる。これらの特徴から、この龍福寺跡の柱状石は、六地藏塔の龕部では



写真6-10 大村・龍福寺跡薩摩塔

なく、薩摩塔という非常に特殊な石造物の一部材（軸部）であることが分かった。

薩摩塔という日本の石造種目には変形塔は、蝶足付き台座・軸部・中台までは宝篋印塔の作風を、その上の瓶形塔身と笠（火輪）はむしろ五輪塔を思わせる形態をしており、両者が混在したような珍しい塔形をしている。軸石四面には四天王像などの尊像を半肉彫りし、笠上の瓶形の塔身には正面に主に如来形坐像を半肉彫りする。笠は軒端に強い反りをみせて頂部に相輪がのると思われる。このような変形塔は、最初（昭和三十年代）に鹿児島県の川辺郡で確認されたため、薩摩以外にない珍しい塔ということ、薩摩塔という名称がつけられた。

ところで、現在まで確認された薩摩塔は、[図6-4](#)「薩摩塔の分布」（久山町教育委員会作成「薩摩塔展」資料）で示しているように、九州圏内でのみ発見されている。鹿児島県で五基分、福岡県で一三基分、佐賀県で六基分、長崎県内で一四基分、総計で三八基分である（[10](#)）。分布は九州の西側部分に当たり、集中的建塔地を含めて偏在性が認められる。分布の背後に東シナ海を意識した物流がうかがわれる。

大きさの標準は、現総高で約七〇センチ程度、最大幅（台座幅部分）が約二五センチ前後の小塔である。特に平戸市野子町志々伎神社の沖津宮・薩摩塔（[写真6-11](#)）は現総高（笠上部なし）が約一五センチであるのに対し、同じ平戸市鏡川町で確認される薩摩塔は現総高が約三〇センチ内外のまことに可愛らしい小型塔であり、大きさに相当なばらつきがある。

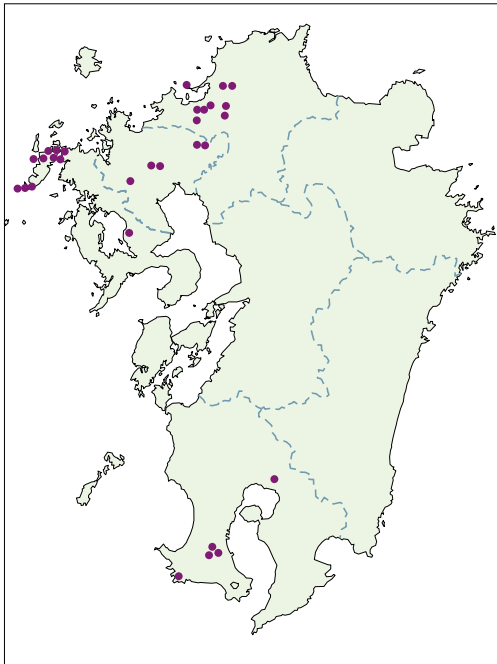


図6-4 薩摩塔分布図（久山町教育委員会作成「薩摩塔展」資料）



写真6-11 平戸・志々伎山中宮津宮薩摩塔

王像を浮彫りにした軸石、瓶形の塔身とその正面部分に主に如来形坐像を花頭形仏龕の中に陽刻する点、笠の背は高く軒端の反りが強い点など、六角と四角の違いはあるものの両塔に共通した意匠が認められる。

また、円筒状の相輪各輪間の擦部は彫りが深く、笠の裏面四隅には一条の沈線を入れ込むことによつて各隅の反りに効果を持たせている。軸部の意匠にもバリエーションがあり、志々伎山中宮近くの墓地と平戸市田平町の四角塔だけは三鉢の尊像(天王像)だけを半浮彫りし、他の一面には一茎の雲紋を浮彫りしている。

彫成形式は一石作りと各部材ごとに制作して積み上げていく重層式の二形式に分類される。大きさは重層式が一石作りよりも大ぶりの傾向があり、各意匠の彫出も優れている。形式論的には重層式塔が古く、その形式化した塔形が一石作り塔と位置づけられるようだが、制作当初から二形式が並存した可能性もあり断定はできない。

以上のように、薩摩塔の形態や彫出上の特徴からは日本国内の石造物に類例を求めるとはできない。そのため、これまでの研究では形式論から中国大陸にその系譜を求めるべきではないかという見方をしていた¹²。

ところで最新の薩摩塔研究は、石材分析という素材論から大きな成果をあげている。特に大木公彦らは、沖津宮塔

次に形態に着目すると、大きく二種類に分類できる。まず第一は四角を基調とするもので、県内では安満岳白山権現や志々伎山中宮近くの墓地、平戸館山・旧是興寺跡、鏡川町、また平戸市田平町の瑞石山海寺(廃寺)などで二五基が確認され、全基数三八基分(うち三基は不明)の約七割を占めている。それに対し、六角を基調とするものは、大型の沖津宮塔と同じ志々伎山中宮近くの薩摩塔、佐賀県有田町黒髪山などで一〇基が確認される¹¹。ただ、四角塔と六角塔には共通の彫出内容が認められる。特に基礎の各隅に蝶足をつけその両端に(蔵手)を刻む点、また各隅に親柱をたてて勾欄を線刻した中台、四面に四天

や龍福寺塔（大村市立福寺町）などの分析から、薩摩塔の石材が中国浙江省寧波産の梅園石であることを指摘した¹³。具体的な制作地は不明だが、「中国で製作された薩摩塔が船舶によって九州にもたらされた可能性が一番高いであろう」¹⁴ことは首肯できる。しかも、沖津宮塔が立つ小島前方の宮ノ浦湾でかつて発見された礎石（現在は平戸市役所正面玄関前に展示）も「梅園石と同じ地層と考えられる、泥岩を挟在する凝灰質砂岩」¹⁵と判明しており、中国・寧波またその周辺から出帆した中国船が宮ノ浦湾に入り、その寄港地であったことを示唆している。

ところで、首羅山遺跡（福岡県糟屋郡久山町）の薩摩塔について、その報告書である『首羅山遺跡発掘調査概要報告』（久山町教育委員会 二〇一〇）で興味深い指摘がなされている。首羅山には中世山岳寺院跡が良好な状態で残っており、平成二十二年には首羅山の中核施設だったと考えられる本谷基壇部の調査が実施された。ここに本来三石彫成（須弥壇・塔身・屋根）からなる薩摩塔二基が宋風^{そうふう}狛犬^{こまぬい}を伴って立ち、報告書では十三世紀中頃の南宋時代の作としている。

この薩摩塔に関し、いくつか注目すべき指摘がなされている。まず、この塔に関わる人々は「中国人商人およびそれに連なる人たち」「環東シナ海世界で活躍する中国人商人」とし「商人たち自らの信仰生活に関わるものであったがために、所在や展開が限られることになったのではないか」としている。当然「薩摩塔の所在地は、中国商人と関わりが深い場」であり、薩摩塔をめぐる信仰は「純然たる仏教に関わるものではない可能性さえある」とし、「塔成立の基盤に仏教信仰があることは間違いないが、そこには土着の信仰が大きく流れ込んでいるのではないか」としている¹⁶。また、志々伎山中宮近くの墓地にある六角基調の一石作り薩摩塔^{写真6-12}の軸部に銘文（願文）が陰刻されている。薩摩塔三八基分で唯一銘文が刻まれた塔であるが、拓本による判読では次のように解釈される（改行、□不明）。

大寶□／真高為現世安穩／後生善處奉獻／志自波峯／元□三年□八月□／敬白

これによれば、「真高」なる人物が現世安穩・後生善処のために志々伎^伎山に奉納したとなり、墓塔というよりも個人の安寧祈願のために奉納したと解釈される¹⁷。肝心の紀年銘は年号の一部や干支などが判読できないため断定



写真6-12 平戸・志々伎山中宮薩摩塔

的なことはいえないが、井形 進は「元亨三年」（一三三三）の可能性が高いのではないかとしている⁽¹⁸⁾。つまり、この薩摩塔は、「真高」なる人物（中国商人？）が十四世紀頃に安寧祈願のために霊山・志々伎山に奉納したと捉えて問題はないようである。実際、薩摩塔の制作は十三世紀を基準にして十二世紀から十四世紀の範疇で中国で制作されたものと考えられる⁽¹⁹⁾。

また、薩摩塔とその建塔場所の関係も重要なテーマである。その関係性を示す最適の場所といえは志々伎山と宮ノ浦湾である。式内社である志々伎神社は四社の総称であり史料の初見は『日本三代実録』貞観二年（八六〇）の条であるが、その沖津宮（四の宮）と中宮（一の宮）近くに薩摩塔が立つ⁽²⁰⁾。また、宮ノ浦湾に浮かぶ沖津宮からは大型薩摩塔と石造宋風狛犬が確認され、またその宮ノ浦湾からは薩摩塔と同じ素材で造られた礎石が発見されている。このことは中国・寧波またその周辺から出た中国船が宮ノ浦湾に入り、宮ノ浦湾の沖津宮と中宮（当時の鎮座地は現在の位置より上方にあった）近くに薩摩塔を建塔したことは間違いない。当然その寄港地は中国商人と深い関わりが生じている場所と考えられるのだが、ここで中国船の寄港地とその近くの霊山及び霊地というセットが薩摩塔建塔の条件として浮上してくる。

ただ、そこで問題になるのは、建塔地（霊山・霊地）と寄港地の関係を前提にして薩摩塔を建塔するに至った動機である。仮に中国船寄港と中国人商人の条件が満たされたとしても建塔に至る動機は不十分である。何故にわざわざ中国から持参した石塔を日本側の霊山や霊地に建塔したのだろうか。建塔の主体者は「中国人商人およびそれに連なる人たち」⁽²¹⁾であろうと考えられるが、問題は、それら建塔の主体者中国人と霊山・霊地を結びつける関係性である。例えば平戸・安満岳の建塔地は、現状からは神殿の背後に位置する。当時の神殿が現状の位置にあったかどうかは不明だが、薩摩塔が建つのは山頂部であり、霊山としては神域の中心部に当たる⁽²²⁾。しかも、薩摩塔は異国の石塔で

ある²³。この神域の中心部に異国の石塔を建塔しているという事実は、例えマージナルな環境があつたにしても主体者中国人らの独断や建塔場所の提供を靈山側へ懇願するだけでは無理であろう。むしろ靈山側から建塔の主体者中国商人らを積極的に招聘する、又はそれを促す発信がなされたと捉えるべきではないか。具体的には、中国商人らを招聘する意志が靈山側にもあり、宗教上の接点を軸に経済的な結びつきがあつたのではないか。特に安満岳自体が海上交易(中国との交易)に深く関与していた可能性がある。この点は、日引石塔など中央形式塔の集中建塔に通じる。

安満岳頂上部の二の鳥居側に西禅寺跡が遺構として確認されるが、その下方、標高約四九〇mの場所に墓地が展開している。寛永二十一年「安満岳図」(天明七年写)で「櫻岳石」と書かれた露出した岩場手前の平地に築かれた墓地である。その墓地に建塔された石塔群、その中で特に注目すべき石塔といえは、主に十四世紀後半から十五世紀代にかけて建塔されている日引石塔と、同じ中央形式をもった花崗岩製五輪塔である。この中央形式塔、なかでも福井県産の日引石塔が、どういう訳か安満岳の高所に建塔されている。海岸側に建塔されているのが一般的であることを考えれば、安満岳石塔群は極めて特異な事例といえることができる。しかも現状で確認できる基数は三四基分、地下に埋まっている分などを想定すると実際は五〇基分ほどの大量の日引石塔が集中的に建塔されている。この事実から、主に十四世紀後半から十五世紀代にかけての安満岳の盛況ぶりが理解できる。と同時に、日引石塔がもつ広範な海のネットワークの所産という性格から、安満岳宗教勢力による海上交易への関与が指摘できる²⁴。

また、薩摩塔の建塔地を個別的に精査すると、例えば沖津宮の薩摩塔は小島の低地に志々伎神社沖津宮としての靈地の性格が読み取れるが、平戸市街に点在する薩摩塔(是興寺跡、岩の上町、誓願寺)は靈山というより中国船寄港地その上陸地の性格が強く、後代の媽祖の苦薩揚げ的な性格が想定される。特に後者の寄港地上陸地における奉獻という性格は、ここで問題にする龍福寺跡薩摩塔の建塔背景を考察する上で重要な示唆を与えている。

龍福寺跡は、中世大村を代表する古刹・郡七山十坊の一カ寺跡である。創建は、「紫雲山延命寺縁起」記載の宗論(久寿二年(一一五五))に名を連ねる寺跡であることから十二世紀頃までは遡れそうであるが、この寺域内と思われる場

所に薩摩塔の残欠が確認される。その残欠の軸部から想定して、龍福寺跡薩摩塔は本来は六角基調の重層式塔であったことが想定される。この形式は、薩摩塔の中で最大で最古に位置づけられる志々伎神社・沖津宮薩摩塔と同形式であり、その本来の塔形は好塔であつたろうことが想定される。

その時期は六角基調の重層式塔であることなどから、恐らく沖津宮塔とほぼ同時期の十二～三世紀頃だと考えられる。また、外洋と大村湾をつなぐ針尾瀬戸に面した針尾城跡近くで同じ寧波産梅園石製と考えられる相輪付き笠（写真6-13）現状では薩摩塔とは断定できない）が確認される。更に西海市面高にある通称「唐人墓」と呼ばれる墓塔は、十四世紀後半から十五世紀代の花崗岩製中央形式五輪塔と十六世紀代の安山岩製塔五輪塔の各部材を寄せ集めた墓塔であるが、中国関係者に関わる遺構の可能性はある。この事実は、薩摩塔を搭載した中国船が針尾瀬戸を抜けて郡川下流域に到達し、そこから龍福寺の寺域内につながるという搬入ルートを裏付けている。

ただ、大村湾内にあつては郡川河口周辺だけでなく、白井川遺跡における「個」墨書銘白磁碗などの出土から、東彼杵川周辺も中国交流が活発に展開されていた場所と考えられるが、今のところ薩摩塔の痕跡は確認できない。この点から、恐らく大村湾内海で最大の中国交易センターが郡川河口周辺にあり、その最大の集積地と関係をもっていた龍福寺に薩摩塔が奉獻されたように思われる。それだけ当時の龍福寺の性格が、他の郡七山十坊の寺院群以上に中国との交流を積極的に受け入れようとする立場にあつたのではないかと思われる。

なにはともあれ、龍福寺跡で確認される薩摩塔の残欠は、十二世紀から十三世紀頃における当地と中国大陸との交流を裏付けており、大村湾のもつ海上ネットワークの一端を示唆していることは間違いないものと思われる。制作数が極端に少ない特殊塔であるだけに、今後の調査・研究に期待したいと思う。



写真6-13 針尾城跡渡来系笠

■三 中世の宗教と宗旨変化

中世社会にあつて、私達の住む地域でどのような宗教が流布し、しかもどういった階層の人々が宗教の恩恵にあずかっていたかを研究することは非常に困難である。ただ、中世の石塔類を丹念に調べていくと、おぼろげながらもその地域における宗教の有り様が分かってくる。ここでは、石塔類から見た大村地方の中世宗教とそこに起こった宗旨変化について述べる。

郡川周辺には、弥勒寺町、立福寺町など、地名としてその名を今に伝える中世の寺院群があつた。主に鎌倉時代から室町時代にかけての、いわゆる「郡七山十坊」と総称される寺院群である。これらの寺院群は、天正二年（一五七四）のキリシタンによる寺社破壊によつて破却されてしまい、その全貌は今なお明らかでない。

さて、これら郡川周辺の中世・諸寺院の宗旨について、これまでは「郷村記」など主に江戸期編纂の書をベースに考えられてきた。本来、中世寺院にあつては一つの宗旨に縛られない複層的な宗教環境にあつたことはいうまでもないことだが、「郷村記」などに従えば、例えば郡川周辺の寺院群の中でも特に代表的な寺院として登場する延命寺・弥勒寺・東光寺・龍福寺などは禅宗、また極楽寺・冷泉寺などは真言宗とされてきた。

ところが、寺跡に残る中世石塔類を調査していくと、十四世紀後半に大きな政治社会上の変動が起こり、それを境に寺院群の宗教環境に変化が起こった可能性が出てきた。つまり、十四世紀後半を境にして、それ以前とその後との宗教環境が異なり、十四世紀後半以降の宗旨を伝えるのが「郷村記」ではないかということである²⁵。

郡七山十坊の一つ東光寺も、天正二年（一五七四）のキリシタン蜂起により破却され、その破壊行為は宗教施設はもろろんのこと墓石や供養塔までも及んだ。この破壊を裏付けるかのように、建塔当時の姿を今に伝える完全なものほとんど確認されないが、東光寺跡には幸いにも約二〇基分の石塔残欠が残っている。

この寺跡に正和五年（一一三六）銘の宝塔（緑色片岩製 善頭写真）がある。笠以上を欠落しているが、複弁一六葉の反花をもつた基礎と上方に納入孔を彫つた塔身からなる見事なもので、現総高は約六六センチメートルである。その塔身には、

次のような銘文が刻まれている。

奉為東光院阿闍梨性元也正和五年十二月八日造立之前十一月初四日丑尅逝去在世七六年而已

この銘文中にある「東光院」が東光寺に比定されることから、鎌倉時代、この寺院は、これだけの大型宝塔を建て得る高僧をかかえていた有力寺院の一つであったろうことが想定される。また、その銘文中に「阿闍梨」という僧位（職位の称号）が刻まれている。この職位名称は真言・天台の僧位であるため両派のどちらかの系統に深く関わっていたことが想定され、更に熊野修験当山派（真言宗）の「阿闍梨」に関係する可能性もある²⁶。

ところで、この宝塔の塔身は内部が深く抉られ、いわゆる納入孔が彫出されている。恐らくこれは山岳修験による納経の習慣が影響し、宝塔の納入孔彫出につながったものと考えられる。この東光寺跡宝塔と同じように基礎上端に反花を造り出し塔身部分に納入孔が穿たれているものに、脊振山靈仙寺跡宝塔²⁷や熊本県山鹿市の弘安六年（一一八三）銘藤井八幡宮宝塔、同県山鹿市鹿央町霜野の元亨二年（一一三二）銘真堂浦宝塔があり、制作年代は三基とも鎌倉時代となっている。特に熊本県の二基は共に「如法経塔」と刻まれ、如法経つまり書写された経文特に法華経が納入されていたと考えられる。

如法経写経は修験の重要な修行法であることは五来²⁸重や中野幡能らが指摘²⁹しているが、西肥前山岳修験の拠点の一つである多良・経ヶ岳から出土した経筒にも「今如法経者永仁二年卯月上旬」と書かれていたという²⁹。

以上の各点から、納入孔彫出宝塔は、山岳修験関係者による埋経思想の影響が考えられる。特に東光寺跡宝塔は、銘文から墓塔と考えられるため納入孔には遺骨・遺髪等の納入が考えられるが、被葬者である「阿闍梨性元」なる人物は山岳修験に関係深い人物であったように思われる。

また、当地に伝わる「紫雲山延命寺縁起」という江戸期に書写された文書によると「延命寺元來行基尊開基而法相宗也從何時以真言之法味備業師如來耶」とあり、郡七山十坊の一カ寺・延命寺が真言系の寺院であったことが述べられている。また、この縁起では久寿二年（一一五五）に天台の教義に傾倒した唐泉寺住持春輝と旧来の教義（真言）にあ

る延命寺など近隣一三寺の住持を集めての宗論が行われたとなつてゐる。この一三寺の中に東光寺があることから、当時の東光寺は延命寺同様に真言系に深く関わつてゐたことが理解される。ただ、この文書は江戸期に書写されてゐるため資料としては弱い。先述した正和五年（一一三六）銘宝塔の銘文でほぼ裏付けられるため、当時の東光寺の主体をなす宗教は、真言系それも多良山を背景にした山岳仏教との関係が深い寺院であつたことが想定される。

ところで、この縁起序文に、至徳二年（一一八五）乙丑三月、延命寺僧月海により書かれた次のような文章がある。

貞治五年歳在丙午春三月係栢梁之災傷哉齊摩尼寶殿方丈僧坊殫委煨燼唯今但有等身之像耳乃大檀那藤原純弘公
倏然而慷慨時經營乎卍堂奉安置於金容復十二之僧房稍建立其三所衆徒河畔散干他郷（略） 至徳二季乙丑三月

日

これによれば、貞治五年（一一三六）に栢梁之災傷に係り、摩尼寶殿、方丈、僧坊がごとごとく煨燼と化し、等身之像のみが残つた。その無残な光景を目にした藤原純弘公は倏然慷慨し復興に乗り出し「十二之僧房」を復したとなつてゐる。この序文中、特に「大檀那藤原純弘公」と書かれてゐる部分などはどこまで信賴できるか疑問であるが、南北朝時代の貞治五年（一一三六）に寺院群が火災にあひ灰燼に帰したという件は注目すべきである。

先ほど寺院群の一つ東光寺跡に正和五年（一一二六）銘の宝塔があり真言系を主体とする寺院の可能性が高いと記したが、同じ東光寺跡に「寶徳四年／當庵開基天拘易公禪」と記した五輪塔の地輪があり、寶徳四年（一一四二）に亡くなつたと考えられる「天拘易公禪」が當庵の開基となつてゐる。しかも密教ではなく禪宗を想定させる銘（公禪）があることから、縁起文書に記されてゐる貞治五年の寺院群火災は、その年号の正確さは別にしても、南北朝の争乱期に実際に起こつたことではないかと考えられる。しかも、その後の復興を経た時には、その宗旨は禪宗に変化してゐる可能性が高い。このことは、江戸期編纂の「郷村記」に記載されてゐる室町時代までの東光寺などの宗派が禪宗となつてゐることと一致するし、しかも東光寺跡や延命寺跡などで確認される室町時代以降の石塔の銘が、それまでの銘文とは違つてすべて禪宗関係の銘に変化してゐることからも理解される³⁰。

以上のことから、東光寺をはじめとする郡川周辺の中世寺院群は、南北朝時代に何らかの政治的社会的変動に見舞われて寺院群は破却され、その混乱期をへて宗旨変化が起こり、真言系から「郷村記」記載の禅宗系などに化したのではないかと考えられる。実際、「開基」や「中興」などが表れた時代は、常に何らかの変革期に当たっていたのである。なお、郡川周辺における貞治五年の寺院群火災とほぼ時を同じくする正平十九年（一三六四）年から六年間にわたって、郡川周辺同様、寺院群が密集した大上戸河畔でも大般若経六〇〇巻の写経という大事業が行われている³¹。南北朝の争乱期にあつて、当大村地方でも大きな変動があつたことがうかがわれる。

■四、「海夫」銘五輪塔に見る海民達の盛衰

平成八年（一九九六）、長崎県西海市西彼町八木原で、大量の中世石塔が出土した。志田三郎を祀る祠堂の建て替え工事の際、その基壇部分から出てきたもので、五輪塔や宝篋印塔など計三七基分、しかもどういふ訳か、出土したほとんどは各石塔の基礎（地輪）部分だけであつた。このことから、これらの石塔は、かつて祠堂を作る際に基礎部分だけを基壇として転用し、他の部材は他所に遺棄したのではないかと考えられる。江戸期編纂の大村藩の総合調査書「郷村記」八木原村の項によると「此處に刎木の城主志田三郎儀憲の墓と云傳へ古墓あり、壹間方位の塚あり、温石の石塔數々あり」³²と記されているので、この石塔群は八木原氏に関係する墓塔群の可能性が高いように思われる。この祠堂のすぐ北側の山頂が刎木城跡であるがここからは多数の輸入銭が出土しているし、また近くの墓所からは鎌倉後期の緑色片岩製の宝塔塔身も確認されるなど、西彼杵半島の内海の中では早くから有力層の存在が確認される地域の一つである。

三七基分の制作年代は、寛正四年（一四六三）と応仁三年（一四六九）の年号銘を刻んだ二点を含め、形態や石質から見て、その大部分は一四〇〇年代前半から一五〇〇年代にかけてのもので、一族に関係する石塔群と考えらる。ただ一点だけ確認できる滑石製の宝珠は宝塔（又は笠塔婆）の一番上にのるもので、平安末から鎌倉初期（一二〇〇年前後）頃の制作と考えられ、経塚上に建塔されていた可能性が高い。

ところで、ここでは一〇点ほど銘を刻んだものが確認されるが、その中の一点(五輪塔地輪)に「海夫／道浦」(写真6-14・15)とある。「海夫」の文字は、地輪前面中央に陰刻された「道浦」の右側一字上に刻まれていることから、「海夫」は明らかに法名「道浦」の呼称(職業)と考えられる。制作年代は、形態や石質などから多分に十五世紀前半から半ば頃と思われる。

「海夫」の初見は平安末期の『小右記』に出てくるが、その生業の内容を記したものは『権記』(藤原行成の日記)にある。

「海夫」とは、平安後期以降、主に西北九州で船を生活の舞台として漁労・運搬を生業とした海民をさし、『風土記』などに出てくる白水郎の流れをくむ人々といわれている。多くは二〜三艘の船で構成された一族集団で、時にはそれらが集まって一〇艘以上の船団(党)をなして活動した。家船は、この海夫の後裔とも考えられ、また倭寇を支えた海民であったろうことも考えられている³³⁾。

海夫は、様々な分野で活動していた。中でも廻船による広域に及ぶ交流活動は注目すべきものである。例えば、西彼杵半島産の「石鍋」は、主に平安〜鎌倉時代にかけて制作され、遠くは畿内・鎌倉まで運ばれている。実は、この運搬を担ったのが、半島の浦々に根拠をおく海夫その廻船による可能性が高く、そのため多額の財貨が、この地にもたらされたものと思われる。

ところで十五世紀後半の朝鮮の書『海東諸国記』や十六世紀の中国の書「籌海図編」には大村湾沿岸を含めた西海の地名が記されているが、これらの地は、当時、大陸と交易があった場所と考えられる。勿木城跡から出てきた輸入銭や龍福寺跡(大村市立福寺町)の薩摩塔、郡川下流域の寿古遺跡や東彼杵町白井川遺跡などで出土した大量の貿易陶



写真6-14 「海夫」銘地輪



写真6-15 「海夫／道浦」銘拓本

磁器などは、その交流を物語る貴重な遺物と思われるが、このような広域に及ぶ交流の主体である中国商人を基底で支えたのが在地側では海夫集団であったように思われる。

「海夫」銘の入った石塔は、いろいろなことを語ってくれる。まず十五世紀前半～半ば頃に、海夫を名乗る「道浦」という人物は、五輪塔を建塔できるほどの有力勢力に成長していたことが考えられる。かつては譲与・売買の対象にもなった海夫の中から、例え一部であれ、十五世紀にはある程度の力をもった有力層が出現していたことを示唆している。また、先述したように、これまで石鍋の広域に及ぶ運搬に海夫が関わっていたことが想定されていたが、今回確認された「海夫」銘石塔で、よりその信憑性が増してきたと捉えられる。事実、同遺跡の背後にあたる西海市西彼町平山郷などでは石鍋の採掘遺跡が点々と確認されている。

また十五世紀前半頃を境にして、対馬・五島・平戸などの離島部と本土部で石塔の建塔状況が変化している。十五世紀前半までは離島部を中心に建塔されていたが、その後は全くと言っていいほど姿を消し、その後は本土部で集中的に建塔されている。このような中世石塔の表れ方が一体何を示しているのか、にわかに結論を出すことはできないが、ただ海上を舞台にした活動の主体が、何らかの原因で島々から本土部（西彼杵半島・平戸島南部を含む）へ移動したものとも考えられる。「海夫」銘の石塔は、まさにこの変化を象徴的に示した石塔と考えられる。

ところで、江戸幕藩体制の確立は、海上を舞台に活動した海民たちのエネルギーを奪い去ったと言っても過言ではない。「海夫」をはじめ海上で活躍した人々にとって、規制のない自由な環境ひいてはそこにある多様な価値観こそが彼らの開放的なエネルギーを生み出す源泉であった。彼らの広範囲に及ぶ活動は、その開放的な環境があったればこそ成り立つものであるし、またそのために彼らのもつ文化は、あらゆる文化をも受け入れるマジナル的な多様性に特徴があった。しかし、彼らの夢は、江戸幕府の成立とともに、次第に崩れていった。幕藩体制がもつ国家としての一枚岩的な価値観で地方の末端までもが組織化されてしまい、彼らの開放的なエネルギーは組織の中で押しつぶされていった。現在の長崎県を構成する江戸期の対馬藩・五島藩・平戸藩・大村藩などの成立は、いわば小国家の成立であり、一枚岩

的な国家の論理を忠実に末端まで浸透させる役目を担ったものであった。ここに海民たちのエネルギーな活動を支えた自由な環境はなくなり、彼らの広域にわたる活動の時代は終焉を迎えることになる。

西海市西彼町八木原で出土した三七基分の石塔群は、中世という自由で開放的な環境を維持できた最後の時代の遺物であり、そこに刻まれた「海夫」という文字に、僅かではあるが輝きと憧れを感じとるのは私一人ではあるまい。

■五、交名碑にみる階層分化

東彼杵町を中心に交名碑まぎなひと呼ばれる石塔が確認される。交名碑とは、結縁者などの法名を複数列記した石碑をいい、現在のところ東彼杵町内で五基、大村市内と佐世保市内及び長与町で各一基ずつ確認されている。種目は宝篋印塔と五輪塔である。

交名碑の中で代表的な塔といえは、通称「文安塔」と呼ばれる文安四年（一四四七）銘の宝篋印塔基礎（写真6-16）である。東彼杵町の法音寺郷にあるこの交名碑は、天正二年（一五七四）のキリシタンによる焼き討ちにあつたためか損壊が激しいが、良質の緑色片岩を石材とした大型（二三×四一センチ）の基礎である。基礎の正面には紀年銘とともに「現世安穩／後生善処」などの造立の志趣が、他の二面には五五名の法名が列記されている。このことから、その造塔は、生前中あみかじに予め善根供養をする逆修を目的に五五名の結縁者によりなされたものと考えられる。特に、列記中の「道順禅門」と「妙□禅尼」の二人の法名の上には+印が刻まれており、結縁者の代表（夫婦か）と思われる（34）。

一九九九年四月、彼杵川下流から掘り出された基礎も貴重である（35）。基礎の正面並びに各面に、文安二年（一四四五）の紀年銘と三三名の法名が記され、しかも碑を造つた志趣は、「講筵緇白久衆等」、末尾に「各人施主敬白」と刻んでいる。講筵こうえんつまり各自



写真6-16 東彼杵・文安塔（基礎残欠）

の席・立場は「緇」（黒色の衣を着た僧侶）も「白」（白衣を着ている俗人）も同じであるばかりか、この碑の施主には代表者などなく、各人全員が施主であるという。

また、同じ町内の清心寺跡で確認される宝徳元年（一四四九）銘の五輪塔地輪は、宝徳元年に二人の禪師と二四名が結衆して預修（逆修と同じ）のために造塔していることが分かる。交名碑として「預修」銘が刻まれているのは、現在のところこの地輪を含め二点のみであり、交名碑の性格を知る上で貴重である（表6-3参照）。

そのほか、東彼杵町内では応永十二年（一四〇五）銘基礎と応永二十年（一四一三）銘基礎がある。これら二点も、「逆修」などの銘は刻まれていないが、結縁衆による造塔という側面などから、ほぼ「逆修」のための交名碑として間違いない。

また、大村市萱瀬で出てきた交名碑も一三名の法名を列記し、末尾に応永二十二年（一四一五）の紀年銘が刻まれている。佐世保市内の天神・満浄寺跡の地輪には、側面に二二名の結縁者名（道泉禪門、道浄禪門は勸進元）が刻まれているが紀年銘はない。ただ、その形態などから一四〇〇年代前半頃として間違いない。

長与町洗切では、紀年銘はないが、一七名の法名（祐玉、礼用、礼玉など）と「孫太郎」という実名を陰刻した交名碑が確認される。実名陰刻交名碑として大変貴重である。制作時期は一四〇〇年代前半期と思われるが、萱瀬の交名碑を含め、共に同じ「逆修」目的で造塔されたものと考えられる³⁶。

このように東彼杵や大村、佐世保、長与地区で確認される交名碑は八点であるが、これらは紀年銘や形態から一四〇〇年代前半の約五〇年間に造塔されており、室町時代の前期に集中していることが分かる（表6-2「紀年銘交名碑一覧」参照）。しかも確認される地域が東彼杵・大村・佐世保・長与地域と限定されており、県内全域に共通する傾向とは言い難い。

そもそも、これら交名碑の造塔は、「講をつくって結集することは前時代にみられなかったことであり、地域的結合が進みつつあることを示す」³⁷事例といえるもので、これまでの有力な名主層が崩壊して各地に小名主が成長し

表6-2 紀年銘交名碑一覧

紀年銘	所在地	備考
応永12年(1405)	東彼杵・三根郷	損壊のため数名の法名のみの判読可能
応永20年(1413)	東彼杵・山田平	15名の禪門列記
応永22年(1415)	大村・菅瀬	13名の法名列記
文安 2年(1445)	東彼杵・彼杵大橋下流域	33名の法名列記
文安 4年(1447)	東彼杵・法音寺郷	55名の法名列記(禪門26名、禪尼25名、禪師1名、禪定門1名、禪定尼1名、童士1名)
宝徳元年(1449)	東彼杵・瀬戸郷	26名(禪師2名、24名の法名)

独立する機運が生まれ、それまでの血縁的なつながりから土地に根付いた地縁的な社会ができてきたことを示唆している。言い換えれば、次第に各地の自立化が進み、契約による結びつきが生まれつつあった世相をうかがわせる遺品であろう。逆修碑としての性格を持ちつつも、いざというときの仲間内の性格が、この交名碑から読み取れる。

ただ、県内の物的結合は閉鎖的で弱かった。自分たちで生活上起こる目前の問題を処理しようとはするが、そのエネルギーはそこまでで、広範囲の村落と連帯しようとか、上級の守護や戦国大名等に対して一揆して蜂起しようとするまでにはいたらなかった。この点が、畿内やその周辺での社会とは異なる部分である。しかも、その自立性は十六世紀になっても大きな変化はなかったと思われる。

■六. 「逆修」問題―長崎県大村地方の場合

一. 「逆修」の意味

「逆修」とは、自らの死後の冥福を願うために生前予め善根供養を修することであり、供仏・施僧・誦経などを行い塔碑を造立してその証とするものである。法然上人の作と伝えられる「逆修説法」によれば、生前自らのために供養を修すれば、その功德の全部を享けることができる。これを七分全得といい、死後の成仏疑いなしと説かれている³⁸⁾。

ところで、我が国で最も古い「逆修」の仏事が確認される文献は「百鍊抄」第四・正暦五年(九九四)の条で、関白藤原道隆が東三条第において修したとなっている。また金石文で確認されるものは鎌倉時代以降からで、建長元年(一二四九)銘の石

塔（香川県高松市大宝院）が最も古いものとされている(39)。

二・大村地方の「逆修」碑

死者のために他の者が作善行為を行うのが「追善」であるが、「逆修」また「預修」はその反対で、自身が自分のために生存中に善行を行うことである。その場合、「逆修」仏事の後、塔碑を造立しその証とする際には銘として「逆修」「預修」又は「七分全得」の文字を彫出するのが一般的である。

大村地方で「逆修」又は「預修」と彫出された石塔類は現在二六基分確認しているが、交名碑を含ませると三四基分である。その三四基分中、二五基分に紀年銘が認められる。

県内最古の逆修塔といえ、永仁五年（一二九七）銘の川棚・五輪塔(写真6-17)で、その地輪前面に「源長盛後家尼為逆修立之」と陰刻されている(資料Ⅰ「永仁五年銘五輪塔地輪銘文」参照)。またこの地輪(二・一・三×四二・一〇^テ緑色片岩製)の四面には種子まで含めて一〇八文字が陰刻されており、その銘文内容はもちろんのこと、形態的(二段形式の地輪)、更に遅くとも鎌倉後期から西彼杵半島産の緑色片岩が石塔の素材として使用されていたことなど、石造学的にも大変貴重な五輪塔である。

〔資料Ⅰ〕「永仁五年銘五輪塔地輪銘文」(〳は改行)

(南面) 奉造立／塔婆一基／源長盛後家／尼為逆修立之／右志趣者為／比丘尼法阿／滅罪生善往／生極楽證大／菩提乃至法／界造立如件

(東面) 諸行無常／是生滅法／生滅々已／寂滅為樂

(北面) 本地法身／法界塔婆／大日如來／三摩耶形

(西面) 永仁五年丁酉／十一月三日／比丘尼法阿／敬白／南無

阿弥陀仏

さて「逆修」彫出石造物の種目は、五輪塔地輪一六点(無紀年二点)、



写真6-17 永仁5年銘五輪塔(川棚)

表6-3 【資料Ⅱ】紀年銘彫出逆修碑一覧（紀年銘交名碑含む。□は不明 /は改行）

時代	紀年銘	地区名	種目	関係銘文
鎌倉	永仁 5年 (1297)	川棚	五輪塔地輪	源長盛後家尼為逆修立之
南北朝	康応 2年 (1390)	大村・石走	五輪塔地輪	逆修□根塔婆
室町前期 1392～ 1467	応永12年 (1405)	東彼杵・三根郷	宝篋印塔基礎	日本国肥前州／彼杵村居住中 (損壊のため6名の法名のみ 判読可能)
	応永20年 (1413)	東彼杵・山田平	宝篋印塔基礎	時講結衆各々敬白 (十五名の禪門列記)
	応永22年 (1415)	大村・萱瀬	宝篋印塔基礎	十三名の法名列記
	応永25年 (1418)	大村・荒瀬	宝篋印塔基礎	逆修道珍
	文安 2年 (1445)	東彼杵・ 彼杵大橋下流域	宝篋印塔基礎	右志趣者／講筵繼白久／衆徒 (三三名の法名列記)
	文安 4年 (1447)	東彼杵・法音寺郷	宝篋印塔基礎	現世安穩／後生善処／伏願 十万億不／隔寸土必悟自／性 之弥陀八吉／祥六殊勝豈／他 土哉 (五五名の法名列記)
	宝徳元年 (1449)	東彼杵・瀬戸郷 清心寺跡	五輪塔地輪	預修念仏一結衆 (二六名の禪師・法名列記)
宝徳 3年 (1451)	大村・忠霊塔	五輪塔地輪	正玖信女逆修	
室町中期 1451～ 1468	文明 9年 (1477)	大村・三城	五輪塔地輪	預修困泉禪女壽位
	文明12年 (1480)	大村・山下	宝篋印塔基礎	逆修澄尊大徳
	文明12年 (1480)	大村・山下	宝篋印塔基礎	逆修祐貞女
	永正18年 (1521)	大村・三城	五輪塔地輪	逆修善根塔婆一基／守清
	大永 2年 (1522)	大村・延命寺跡	五輪塔地輪	逆修善因智舜壽位
	大永 2年 (1522)	大村・聖寶寺跡	五輪塔地輪	逆修塔婆一基／慶哲〔慶哲〕は大 村山城守純次〔郷村記〕〕
	大永 4年 (1524)	東彼杵・ちよいのどう	五輪塔地輪	逆修 妙風
	大永 7年 (1527)	大村・冷泉寺跡	五輪塔地輪	逆修 妙丹
	享禄 5年 (1532)	大村・冷泉寺跡	五輪塔地輪	逆修 妙珎
	天文10年 (1541)	大村・今富	六地藏塔竿部	逆修権律師／實舜
室町後期 1542～ 1572	天文11年 (1542)	大村・皆同	五輪塔地輪	賀菴慶公壽位逆修
	天文11年 (1542)	大村・皆同	五輪塔地輪	預修五輪一基／□林妙芙壽位
	天文16年 (1547)	大村・坂口	地藏菩薩磨崖仏	願主 田中道学／妙永 ※〔郷村記〕に〔逆修〕と記述
	天文19年 (1550)	大村・忠霊塔	六地藏塔竿部	預修月山桂公座元禪師
	天文1□年 (1541～50)	大村・三城 (現・史料館)	五輪塔地輪	宗珍大禅定門圖圀

宝篋印塔基礎六点（無紀年三点）、地藏石仏・六地藏塔が四基分となっている。当大村地方における「逆修」行為の対象石塔としては、現在確認される範囲では個人施主の五輪塔が一般的であったと考えられるが、室町中期から後期に降るに従い、六地藏塔などが「逆修」行為の石塔として造立されていることが分かる（表6-3資料Ⅱ「紀年銘彫出逆修碑一覽」参照）。

ただ、県下全域をみた場合には、宝篋印塔・五輪塔・六地藏塔・類型板碑など多種多様であるが、中でも六地藏塔と類型板碑（含自然石板碑）が最も多い傾向にある。特に安山岩を主体とする佐賀県側の石造文化の影響を強く受けたと考えられる松浦地方にあつては、六地藏塔などが「逆修」対象の石塔として多く建塔されている。

三、「逆修」造塔の施主とその問題

「逆修」造塔の施主は、一般に個人のこともあるが、同族・僧尼・結縁衆など複数の場合が多いと言われている⁴⁰。しかし、大村地方の場合、「逆修」銘彫出全二六基分のうち施主が個人のもの二三基分（そのうち二基分は宗教関係者）、夫婦のもの二基分、それに施主が複数のもの（交名碑）八基分となっており、個人施主による造塔が圧倒的である。さて、その背景として中世・大村地方における階層分化の進展が他地方と比べた場合、多分に遅かったことが考えられる。当地方にあつても、室町後期に降るに従い造立に参加できた階層は、これまでの一部の有力者から小名主などの階層まで拡大してきたと考えられる。しかし、その拡大幅は狭く、庶民層までも含めた成長はあり得なかつたと思われる⁴¹。

また「逆修」という仏事自体の意味からしても、その造塔階層は限定されてくると考えられる。墓塔でさえ一部の有力階層しか造塔できなかつた中世の時代に、生前中に「逆修」仏事を行い、かつ造塔をするとなれば、より以上の経済的余裕と仏教への深い尊崇、つまりは寺院・僧侶との深いつながりがなければできないことである。そのため、一地域において広範囲にわたる階層の分化・成長を前提とする結縁衆等、複数による「逆修」造塔は、当地における階層分化の未発達という当時の状況を考えれば少なく、有力な一個人の財力等に頼る造塔が一般的で

あつたと思われるのである。

そのような中であつて法名複数彫出の「預修」交名碑である宝徳元年（一四四九）銘の東彼杵町清心寺跡五輪塔の地輪は注目すべきである。この地輪については開 正和の報告があるが、地輪正面とその両側面に升目状に縁取りした中に願文並びに禪師二名ほか計二六名の結衆した法名が陰刻されている⁴²。長崎県内にあつて、交名碑として「預修」銘が彫出されているのは、現在のところ、この五輪塔地輪を含め二点のみである。

〔結縁衆等による「逆修」碑〕

ところで、県内にあつてこの地輪以外に法名複数彫出の交名碑として七基分が確認されている。種目は佐世保市天神町の満浄寺跡の交名碑が五輪塔で無紀年であるが、他の六基分はすべて宝篋印塔基礎で東彼杵町で五、大村市と長与町で各一点が確認される（第三節第二項五参照）。満浄寺跡のものを除いた七基分は、その紀年銘から応永十二年（一四〇五）から文安四年（一四四七）の一四〇〇年代前半から半ばにかけて造塔されていることが分かる。これらは「逆修」や「預修」の銘は彫出されていないが、結縁衆等による造塔という点と、特に文安塔については銘文（現世安穩／後生善処）から「逆修」塔と考えられていたが、これら交名碑とほぼ同時期の「預修」銘地輪が確認されたことにより「逆修」交名碑として裏付けされたことになり、当時（十五世紀初期から半ば）、「逆修」仏事が盛んに行われていたことが分かる。

この交名碑の「逆修」仏事が何故十五世紀前半期に集中しているのか、その背景として幾つか考えられる。まず階層の分化がこの時期から進展したため、これまでの伝統的な有力名主層が分化・崩壊して各地域に複数の小名主層が成長・独立したためと考えられる。この点は、銘文中にある「時講」「一結衆」から講集団成立の有り様がうかがわれる。

またこの時期に結縁衆等による「逆修」仏事並びに造塔を促す宗教的刺激があつたのではないかと考えられる。特に宝徳元年交名碑の銘文に「念佛一結衆」や「弥陀」とあることから、諫早・慶巖寺交名碑造立に関係した時衆（宗

が当地にも広まり、これが結縁衆等による「逆修」交名碑造塔に影響を与えたのではないかと考えられる(43)。
〔夫婦による「逆修」碑〕

夫婦で「逆修」造塔を行っている例として、天文十六年(一五四七)銘入り坂口地藏菩薩石仏(大村市)があげられる。この石仏は一種の磨崖仏で、縦一四七センチ、横一六〇センチの岩右面に厚肉彫りされた一石一尊の地藏菩薩である。

この石仏自体には「逆修」などの文字は彫出されていないが、江戸期に編纂された大村藩の総合調査書「鄉村記」の萱瀬村坂口の項に「此地蔵、往昔田中道學・妙永と云う者の知行□□輪に生存中、逆修に建立したる地藏のよしにて、(略)此道學の俗名田中但馬前氏と云信者にて、定に入て爰に死するよし、妙永ハ其妻なりと云」とあり、石仏銘文の「願主田中道學妙永」と符号する(44)。

また無紀年で「為清阿清心菩提也」と彫出された三浦・六地藏竿部(大村市)も、「鄉村記」三浦村の項に「此石佛ハ大村紀伊守良純清阿入道の逆修と云」とあり、大村純伊の嫡男・大村良純とその妻(清心)の逆修碑であることは間違いない(45)。

以上の二例は、明らかに夫婦が自分たちの生存中に建塔したことが分かる。

また大村市皆同にある二点の五輪塔地輪も、夫婦の「逆修」のためにそれぞれ個別に五輪塔を建塔したと考えられる。この二点は、共に天文十一年(一五四二)銘入りで「逆修」「預修」を彫出し、石材(安山岩)、形態(地輪上端に反花を造り出す)等が全く同じで、同石工による同時造塔と考えられる。銘文の構成内容もほぼ同じで、横幅がやや大の方(二七・〇センチ×三九・〇センチ)は「賀菴慶公壽位」と彫出して男性を示し、小の方(三〇・〇センチ×三七・〇センチ)は「林妙美壽位」と彫出して女性を示している。また共に「五輪一基」と彫出して、長崎県内にあっては例外的に「五輪」という塔名までも陰刻している。このことは、上端に反花を作り出したものが、少なくとも室町後期にあつては宝塔基礎としてではなく五輪塔地輪として製作されていたことを示す遺品でもある。

なにはともあれ、以上の各点から皆同の二基の五輪塔は個別に「逆修」塔として造塔されたものと考えられる。ところで、笠をもつ板状石碑に二体の仏像を半肉彫りした双仏石が多良岳金泉寺を含めた大村地方で八基確認される。この八基は、形態から三種類に分類される。一応ここでは便宜的に妙宣寺型(四基)、東光寺型(三基)、金泉寺型(一基)として区別する。

妙宣寺型は碑面全体に円頂の二体の地藏が彫られ、東光寺型は碑面上段に二体の地藏、下段をあけて法名等を彫出している。金泉寺型は東光寺型に似ているが、笠が別石で造られている。

以上のうち妙宣寺型の下荒瀬山下双仏石(大村市荒瀬町)には二体の地藏の下に、それぞれ「釋世／妙間」と彫出され、また東光寺跡双仏石にも、それぞれ「妙清／道秀」と陰刻されている。この二基の法名は、それぞれ男女を示し夫婦と考えられる。

また東光寺型と同形態の双仏石が佐世保市中里町新豊寺跡で確認され、上段の二体の仏像の下に「カ(地藏)」「キリク(阿弥陀)」の種子を彫出し、更に「欽奉預修妙永／寔天正十二年甲申二月彼岸十六日／奉逆修道清禪門」と陰刻している。

以上のことから、大村地方で確認される双仏石のうち新豊寺跡のものと同形態の東光寺型は「逆修」のために造塔された可能性が高く、更に妙宣寺型の一基に男女の法名を彫出していることから「逆修」のために夫婦で造塔したものと思われる。また、その双仏石が彫出技術も劣り、小型で画一化されたほぼ同形式の石造物であること、更に先述した同形式の佐世保・新豊寺跡のものに天正十二年(一五八四)の紀年銘が彫出されていることから、この種の双仏石は室町後期に同じ造塔目的つまり「逆修」仏事の証のために造立され広まったものと思われる。

なにはともあれ、天正二年、キリシタン大名大村純忠による神社仏閣等の破壊行為により、他の地域以上に中世石造物遺品が少ないと考えられる大村地方で計七基(金泉寺を除く)の双仏石が確認されることは、本来は、他の石造物同様、現在確認される以上に多くの双仏石が造塔されていたものと思われる。このことを考えると、

室町後期には「逆修」関係の造塔が一種の流行の如く相次ぎ、「逆修」仏事の盛行があったものと考えられる。

またこのことは、単に長崎県の大村地方一地域だけに見られる現象ではなく、全国的に見られる現象と思われる。九州北部地域の「逆修」について述べられた松岡 史（史）によれば、「この頃（大永頃・著者註）に多く見られるのが逆修・預修供養碑であり、（略）これは九州北部に普遍的に見られる現象」としている⁴⁶。また、松浦地方で確認される桃山期の多仏塔につき、多田隈豊秋は「逆修」のための造塔として、その著『九州の石塔』で述べられている⁴⁷。

四、室町中・後期盛行の背景

「逆修」のための造塔が、何故、室町中・後期に集中しているのか、その背景として大きく三つの側面が考えられる。まず第一に、「逆修」行為のもつ生存中の仏事造塔という性格から、当時の政治的社会的な混乱が考えられる。松岡が「室町時代も応仁の大乱は各地に飛火し戦乱に太平は崩れ去り、明日も判らぬ世相を反映して後生を願うために大乗妙典読誦、念仏など生前に七分全得を背景とした逆修・預修が盛行したのも無理からぬ事」⁴⁸と述べられているように、当地方にあっても大村氏の敗走問題や純忠キリシタン時代に象徴される混乱があり、その混乱が「逆修」造塔盛行の第一の要因と考えられる⁴⁹。

第二には、造立階層の拡大である。鎌倉・南北朝・室町中期頃までは、少なくともこの大村地方にあつては中世寺院の宗教関係者、更には名主層以上の上級階層しか造塔に参加できなかったと考えられるが、ただ次の室町中期・後期にかけ次第にその経済的成長と階層分化の進展により、少なくとも小名主層又はそれに次ぐ実力格位をもつ役士層までも造立に参加しえたと考えられる。このことは、造立階層が一部の高位層に独占されていた鎌倉から室町前期頃までの「逆修」その他の造塔が地域の有力者のみであり、それだけ形も大きく彫出技術には高度なものがあがるが、室町後期になるに従い小型で画一化・簡素化された、石造学的には退化を意味する造塔が多く確認されることと関係する。

第三には、寺院の集合菩提寺化があげられる。室町後期になるに従い「名」の崩壊と「家」の独立が進み、これま

で有力な檀那に経営を頼っていた寺院経営が檀那の経済的困窮により行き詰まり、多くの寺院側は民衆をその先祖の菩提寺として寺院経営の対象にし、寺院の経営維持に努めた。つまり、寺院の民衆化である。その方策として寺院側は過去帳の整備等を進める一方、一回の葬式だけでなく追善供養などを年中行事に組み入れた⁵⁰。このため中世後期から宗派・地域・階層を問わず「逆修」仏事が激増し、それに伴う石塔造立も増加したと考えられるのである。なお、「逆修」仏事は一般的には江戸初期以降次第に衰え始め、中期以降にはそのほとんどが終息したと考えられる。現代にあつては、過去の歴史の中に「逆修」という仏事があつたこともあまり知られていない。

■七、石仏

一般に仏像といえば木彫仏を思い起こすが、数からいえば石仏の方が圧倒的に多く制作されている。全国的にみれば、鎌倉時代以降、石仏は大衆的に流行した。それは阿弥陀如来や地藏菩薩などの民間信仰の対象が石仏と結びついたためで、その数はおびただしいものになった。特に室町後半からは庶民の参加も増え、小型で簡素化された小石仏などが多数建塔されている。

長崎県内では、特に松浦地方を中心に六地藏塔や県内各地で確認される单体仏など十六世紀後半の佐賀形式石仏（塔）が建塔されているが、いわゆる中世の石仏は非常に数が少ない。その中であつて、大村・郡川周辺一帯では中世の線刻石仏がまとまって確認される稀有な地域である。

郡七山十坊の一つに数えられた弥勒寺は、天正二年（一五七四）のキリシタン蜂起により破却されたが、その弥勒寺跡の寺領内又はその周辺に点在したと考えられる線刻石仏が、現在までのところ如来形線刻石仏一四体、不動明王線刻石仏一体、仏頭三体が確認できる。ただ、これら線刻石仏の制作時期は今だ時代を特定できるまでには至っていない。中世の作であることはほぼ間違いないと思うが、それが鎌倉時代なのか室町時代なのかはつきりしない。そのため、本稿が市史の一編であることを考慮して、後代に資料を伝え残す観点から主な遺品の概観、所在地、採拓画像を記録として留めておきたい。



写真6-18 拓本画像A 仏岩三社大明神如来形線刻石仏

なお、石造学的に同類の資料が他県で認められ、そこを基準にしてある程度の制作時期が絞り込める如来形線刻石仏については、想定できる年代を参考までに挙げておく。

【如来形線刻石仏】

岩壁などに彫られた如来形線刻石仏は現在一四体が確認されており、弥勒寺町内及びその周辺に二一体（石堂屋敷内線刻仏九体については図6-4）、武留路町に三体となっている⁵¹。特に武留路町の仏岩三社大明神として祀られている如来形線刻仏は、三体ともその断崖絶壁に陰刻されており、向かって左端の線刻仏は背高が約四・五尺の巨大仏であり、県内にあつては最大の石仏である（写真6-18 拓本画像A）。

この如来形線刻石仏は、一四体とも形態が全く同一であり、通肩で手印がなく納衣がお椀を伏せた形で両手を被うという非常に特異な形態を持った石仏である。その代表的な遺品が上八竜如来形線刻石仏で、ふくよかなお顔に納衣が装飾豊かに描かれており、線刻石仏としては県内最高の出来栄えを見せている（巻頭写真 拓本画像B）。ただ、現在は彫出面の磨耗が激しく、肉眼ではその全貌を見ることはできない。

同じ形態を持った仏像としては、禅宗の間で行われた「三十日秘仏」の中の四尊（朔日の定光仏、七日の三萬燈明仏、九日の大通智勝仏、十二日の難勝仏）などが当たるが、遺物としては脊振山靈仙寺跡から出土した単体仏や岩



写真6-19 鹿島・興法寺滑石製单体仏

屋山興法寺（鹿島市）の丸彫り坐像单体仏などが挙げられる。

脊振山（佐賀県神埼郡）といえは九州を代表する霊山の一山であり、その台蜜系仏僧・修験者等の最大の拠点であったのが霊仙寺跡である。その経塚遺構から三体の滑石製单体仏が出土しており、一体は智拳印を結び結跏趺坐した金剛界大日如来坐像を造り出している。他の二体が如来形坐像の单体仏であるのだが、その形態は「両肩に衣を掛けた通肩にし、首下の胸の部分は衣より一段と彫り下げて肉身部をのぞかせている。腹前には右袖口を上にして供手し、両手を衣の中に隠して印を結んでいる」[52](#)としている。

また、佐賀県鹿島市の岩屋山興法寺の二体は滑石製の如来形丸彫り单体仏（[写真6-19](#)）で、現在は蓮蔵院に保管されている。この二体も納衣が腕状に伏せた形で両手を被っており、脊振山の二体を含め、郡川周辺の如来形線刻石仏

一四体と同形態である。

この脊振山及び興法寺の滑石製单体仏は共に平安後期から鎌倉時代初期の年代が与えられている。この点からも、郡川周辺で確認される滑石製の单体仏にも同様な制作年代が想定され、しかも埋経に伴う経塚との関連が考えられる。

ただ、平安末から鎌倉初期という制作年代が、ここで問題にしている如来形線刻石仏一四体に適合できるかとなると話は別である。というのも、この如来形線刻石仏の制作時期を特定する際、現在、妙宣寺裏の墓地に置かれている五輪塔水輪が手がかかりになると思われる。

市内福重町の妙宣寺は初代藩主大村喜前によって建てられた古刹であるが、その本堂に裏山道を作る際、土中から宝篋印塔基礎と五輪塔水輪などの部材が発見された。共に石材は緑色片岩製で、宝篋印塔基礎には応永十三年



写真6-22 拓本画像D 福重如来形
線刻石仏拓本



写真6-23 拓本画像E 石走古墳如来
形線刻石仏



写真6-20 大村・妙宣寺五輪塔水輪



写真6-21 拓本画像C 石堂屋敷如
来形線刻石仏

(一四〇六)の紀年銘が陰刻されていた。問題なのは五輪塔の水輪(写真6-20)で、その四側面に舟形光背状の彫り窪めの中に如来形坐像が薄肉彫りで造り出されており、その形状がすべて通肩で手印がなく納衣がお腕を伏せた形となっている。四仏とも頭部が破壊を受けているが、その形状は如来形線刻石仏と全く同形である。制作時期は、水

輪の大きさ(横幅二九・五センチ、背高一二・〇センチ)と良質の石材、重心がほぼ中心にある点などを考えると、応永十三年の紀年銘をもった宝篋印塔基礎よりも以前、恐らく十四世紀の半ばから後半頃の制作と考えられる⁵³。仮にその制作時期を前提にすれば、十四世紀代には如来形線刻石仏と同形態の如来形坐像が五輪塔水輪に刻むほど当地域で流布していたということになり、当地域に散在する如来形線刻石仏の制作時期を考察する上で一つの示唆を与える事例と考える。

この点につき、八尋和泉は「線



写真6-25 拓本画像 F 「不動明王」線刻石仏



写真6-24 「不動明王」線刻石仏

刻石仏（如来形）について、長細形の頭部のものは鎌倉末から室町時代のものに多い。手印がないものも古い時代にある。しかし、地方によって異なった特色があるので年代を決定するのは容易でない⁵⁴とコメントされている。

なお、如来形線刻石仏一四体がすべて同時期に制作されたとは考えられない。特に仏岩三社大明神の三体のうち巨大線刻石仏と他の小石仏は、彫出の仕方や図像は明らかに異なっており、制作時期の違いを示唆している。

制作時期を含め、これら一四体の如来形線刻石仏が誰が何を目的に刻んだのか現段階では不明といわざるをえないが、当地域のもつ豊かな歴史を今に伝える貴重な文化財であることは間違いない。山岳修験との関係を含め、今後の調査に期待したい。

【「不動明王」線刻石仏】

この「不動明王」は、弥勒寺公民館の道路側に立ち、高さ一六〇センチの自然石に坐像として線刻されている。弥勒寺は、かつての郡七山十坊の一つに数えられた寺院で、天正二年（一五七四）のキリシタン峰起により焼亡した。現在、公民館が建つ所は、かつての弥勒寺の寺領内に当たる場所といわれ、その前方に当たる石堂屋敷と呼ばれる所には線刻如来像や仏頭が一〇数点確認される。この「不動明王」は、火焰光を背に一目諦視の岩座に座し、右手に三鈷劍^{さんこけん}、左手に羅索^{らかさく}をもち、上下二牙を出して上唇を噛み、忿怒の形相をあらわしている。表現そのものは一般のものとなりはしないが、装飾豊かで華やかなものとなっている。制作時期は多分に鎌倉時代と思われるが、まだ不明な部分が多く、その造立意図などは分かっていない。

なお、多田隈著『九州の石塔』では、その造立年を鎌倉中期から後期に近しいものとしており、また松岡著『肥前の板碑』でも、やはり鎌倉時代とし、多良岳修験に関するものとして紹介している。特に八尋は拓本上からの鑑定で鎌倉末期頃ではないかとされ、当碑の造立背景を探る上で貴重な示唆を与えている⁵⁵⁾。

【仏頭】

郡七山十坊の一つ弥勒寺の寺領内又はその周辺に位置する石堂屋敷には、先述したように滑石製の経筒や滑石製単体仏、如来形線刻石仏九体が確認されるが、他に三体の線刻仏頭も確認される⁵⁶⁾。

仏頭Ⅰ〔写真6-26〕は安山岩の自然石転石を転用したもので、当地の仏頭を代表する遺品である。頬から眉にかけて石面が新しく後代手が加えられた可能性もあるが、目鼻立ちもしっかりと彫られ、杏仁形の目や唇も丁寧な彫出で表現されている。

他の二体の仏頭が粗雑でたどたどしい彫出内容となつているのとは明らかに違っている。ただ、薄肉彫りされた鼻・眉とは別に部分的に線彫りの痕と思われる線刻も認められるため、あるいは最初にほかの二体の仏頭同様に粗雑に彫出され、その後手が加えられて薄肉彫りのな仏顔を持つに至ったのかもしれない。

仏頭の名称については、三体共に円頂の頭から考えて地藏菩薩として造り出された可能性もあるが、その制作時期について八尋は「仏



写真6-26 石堂屋敷仏頭Ⅰ

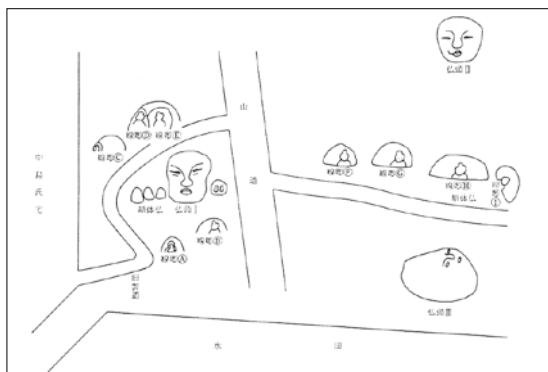


図6-5 石堂屋敷石仏配置図

頭(仏頭工)は線刻と異質のもので、ハッキリ分らないが、たぶん室町末期頃ではないかと」とされた⁵⁷⁾。この室町末期という制作時期は、次に述べる天文十六年(一五四七)銘入り坂口・石造地藏菩薩や天文十年(一五四一)銘入り今富・六地藏塔竿部など、当地にあっても地藏関係の造立のが盛んだったことは間違いない。

【石造地藏菩薩】

坂口・西教寺側の愛宕大権現^{宮真。27)}に、その本地として「願主田中道學／妙永／天文十六丁未九月四日」と刻まれた石造地藏菩薩がある。縦一四七^{センチ}、横一六〇^{センチ}の大石面に厚肉彫された一石一尊の非常な特徴をもった地藏菩薩である。この地藏菩薩は、天文十六年(一五四七)に田中但馬前氏(法名道學、妙永は妻の法名)が己の逆修のために造りあげたもので、道學自身の顔ではないかと思われるほどの俗世の顔をもった地藏菩薩である。彫出技術には拙いものがあるが、逆にその拙さが一種の魅力となつて拝観する者をひきつける。

ところで、この地藏石仏は、キリシタン時代以前に造立されたにもかかわらず損壊部分がほとんどなく、造立当時のほぼ完全な姿を今に伝えている。ましてこの地藏石仏がある場所は、キリシタン大名大村純忠の最後の居館・坂口館のすぐ近くに当たるところである。中世の神社仏閣や墓石までもことごとく破壊したキリシタン勢力は、何故この地藏菩薩だけは破壊しなかったのか謎である。

なにはともあれ、天文十六年銘入りで、これほどのスケールをもった石造地藏菩薩は、大村地方はもちろんのこと県下にあつても非常に珍しく、貴重なものと思われる。



写真6-27 石造地藏菩薩

■八・中世・大村氏に関する石塔とその特徴

近世・大村氏の墓塔群は本経寺にあるが、中世・大村氏の石塔は現在のところ紀年銘彫出の石塔が三基、無紀年のものが一基の計四基（すべて残欠）だけで、四基とも大村市内のみで確認されている。大村氏の本貫地といわれる佐賀県鹿島市内では確認されていない。大村市内の四基とは、大永三年（一五二三）銘入り「中庵」五輪塔地輪（大村市立史料館蔵）、天文十年代（一五四一～五〇）造立の「宗珍」五輪塔地輪、「清阿・清心」六地藏塔竿部、それに大永二年（一五三二）銘入り「慶哲」（大村山城守純次〔郷村記〕の法名で大村家十五代純治の弟の子⁵⁸）五輪塔地輪である。

「中庵」地輪は、正面に「大永三年癸未／中庵／七月十二日孝子敬白」、その左側面に「平朝臣前勢州純伊」と陰刻され、その彫出技術は見事である。純伊の官名に「前」を伴っているのは既にこの人物が生存しないためで、永享五年（一四三四）銘「前菊池肥州澄安上坐分」（大村市三城町）、応仁元年銘「前四州太守観音寺園」（佐世保市中里町東漸寺）、延徳四年（一四九二）銘「前丹州太守妙光寺殿」（佐世保市武辺町阿弥陀堂）などと同じ用法と考えられる。また、大永三年の没年時に適する大村氏関係者を考えた場合、法号「中庵」は純伊に比定されるため、この中庵地輪は大村家一六代といわれる大村純伊の墓碑としてほぼ間違いない。

ただ、被葬者である純伊の銘を地輪の正面ではなく左側面に彫出していること、大村家資料では純伊の官名は信濃守であり逝去年が天文六年となっていること、また純伊の次に大村家の家督を継いだといわれる大村純前が天文七年（一五三八）に上洛して将軍足利義晴への家督相続安堵のため謝礼を行っていることなど、まだこの「中庵」地輪に対する問題は残る。

次に「宗珍」地輪の「宗珍」とは、大村家一七代丹後守純前の法号である⁵⁹。「大村家記」などによれば、純前は「純伊二男／丹後守／天文二十年辛亥六月十五日卒／法名寶山宗珍大居士ト號ス」⁶⁰とある。ただ、この「宗珍」地輪は、その銘文に「逆修」とあり、生前中の天文十年間に造立されたものである。

「清阿・清心」六地藏塔竿部の「清阿」とは、大村純伊の嫡男良純のことである。「郷村記」三浦村項に

此石佛ハ大村紀伊守良純清阿入道の逆修ト云〔信濃守純伊の嫡男、法名加翁清阿大居士ト號す、永禄十二己年三月六日卒す、墓ハ郡村黒丸ニ有り〕

とある。現在は竿部のみの残欠であるが、六地藏塔という石塔種目の性格から考えて、清阿・清心つまり大村良純夫妻の逆修碑であることは間違いない。

良純は純伊の嫡男であるにもかかわらず、次男の純前に家督を譲らざるをえなかった不運の人物である。大村家史料⑥①では良純が病弱であったためとなつてゐるが、有馬氏との関係から有馬氏に近い弟の純前に家督が譲られ、その正当化のために良純の病弱説が作られたものといわれている⑥②。だからこそ良純は、逆修塔を建塔することで生前中の安寧と死後の冥福を願つたものと思われる。

ところで、四基のうち、明らかに墓塔と考えられるのは「中庵」地輪の一基だけである。僅か一基だけで資料的に乏しいが、仮に大村氏が墓塔として五輪塔を選択したとなれば非常に特殊な事項である。周囲の中世領主の場合、墓塔としては五輪塔よりも宝篋印塔を使用するのが一般的で、実際、宝篋印塔は五輪塔に対し約三倍ほどの経費と装飾豊かな塔種として上層クラスが好む石塔である。例えば松浦宗家の一三代盛・一四代定等の宝篋印塔⑥③や有馬氏関係の石塔群と考えられる古藺石塔群もすべて宝篋印塔である。また熊本県菊池市の正観寺に残る菊池武澄・武政（一六代）・武国の墓塔も宝篋印塔である⑥④。

では何故に大村氏は五輪塔にこだわつたのか、その背景には覚鑊上人との関係があるのではないかと考へている。覚鑊と五輪塔との関係については、第三節第三項で触れるが、大村氏の本貫地といわれる鹿島（藤津荘）出身の覚鑊は「五輪九字明秘密釈一卷」⑥⑤を著して五輪塔を理論化し、仏教の所産として位置づけた。そのため各種目の中で五輪塔が特に注視され、全国に五輪塔が広まる素地が作られた。恐らく大村氏が各種目特に宝篋印塔よりも五輪塔にこだわつた背景には、同じ鹿島を故地にもつ覚鑊の影響があつたのではないかと思われる。

なお、中世・大村地方で確認される緑色片岩製の地輪等の大きさを調べてみると、石塔制作段階で、例え明文化されなくとも、大きさに一応の基準があつたのではないかと思われる⑥⑥。大村氏関係では僅か三例（「中庵」地輪・横

幅五三〇^{ミリメートル}、「宗珍」地輪・横幅四九三^{ミリメートル}、「慶哲」地輪^{三二五ミリメートル}のみを対象に具体的数値を出さざるを得ないが、多分に横幅が五〇〇^{ミリメートル}、またその数値の前後が領主クラス、大村氏といえどその傍系は三〇〇^{ミリメートル}前後が基準値であったように思われる。

三 中世・鹿島の石造物 ―特に寛鑿上人とその影響について―

■一・鹿島の中世・石造物概観

大村氏の本貫地といわれる佐賀県鹿島市は、石造的には安山岩製塔文化圏に入り、多良山系を境にして大村地方の緑色片岩製塔文化とは異なった石造文化を持つ。しかも周辺の武雄市や嬉野市（特に東吉田地区）の石造文化とも各遺跡ごとに微妙な差異を示している。

鹿島市内では平安後期に比定されている岩屋山興法寺の滑石製十一面観音菩薩坐像宝塔（現総高三四・二^{センチメートル}）が今の段階で最古であり、その宝塔と同時代の笠が貝津天満宮の境内で確認される。また、同じ興法寺にあった滑石製の如来形坐像单体仏が二体確認され、更に同じ岩屋山からは滑石製の経筒（外筒）が確認されている。これらの素材である滑石は、その石質からみて西彼杵半島産であることはほぼ間違いのないものと思われ、片山経塚出土の滑石製品（外筒と石鍋用蓋か）なども西彼杵半島産と思われる。

次に登場するのが筒口の山下石塔群にある安山岩製の宝塔（写真6―28）である。塔身（総高四一・二^{センチメートル}）だけの残欠であるが、塔身四方に「阿弥陀三尊」と「釈迦如来」の種字が大ぶりの縦長に彫られ、上端の首部は損壊が激しいが背高は低くて塔身本体のみが強調され、内部に約五^{センチメートル}ほどの納入孔が穿たれている。製作時期は、その長身大型の形態と大ぶ



写真6-28 鹿島・筒口山下の宝塔塔身

りの種字などから一二〇〇年代半ば頃と思われる、嬉野市温泉地区で確認される安山岩製宝塔（塔身の残欠）より先行することは間違いない。更に、同じ鹿島市内では、凝灰岩製の宝塔が普明寺境内で確認される。この宝塔は塔身（総高三四・二センチ）のみの残欠であるが、四面には筒口宝塔と同じく「阿弥陀三尊」と「釈迦如来」の種字が陰刻され、その彫り出し部分には墨痕が今も残っている。この宝塔の製作時期は一三〇〇年前後頃と思われる、筒口宝塔へと続く遺品であろう。ただ、この普明寺宝塔は、その石材が溶結凝灰岩という点とその形状から考えて、恐らく肥後方面から搬入されたことは間違いない、蓮巖院前方の墓地隅で確認される路盤付き笠（溶結凝灰岩製）と同時期に運ばれ建塔されたと考えられる。

以上挙げた古式石塔類以後は、一三〇〇年代後半以降一四〇〇年代にかけての石塔類が数カ所で確認される。その一つが、蓮巖院前方墓地隅にある安山岩製の路盤付き笠、鹿島・浜（湯ノ峰）の丘頂墓地内の宝篋印塔相輪（安山岩製）、松岡神社前方の祠堂内にある相輪（安山岩製）などである。更に一五〇〇年代になると、小型で簡略化（形式化）された大量の石塔類が蓮巖院周辺、能古見、七浦地区など各所で確認され、その造塔の様相は、階層分化の進展や寺院の集合菩提寺化などを背景とした他地域の確認状況とほぼ一致している。

■二、石塔類にみられる覚鑊思想の影響

覚鑊は、肥前国藤津荘（現鹿島）出身で、嘉保二年（一〇九五）に伊佐平次兼元の三男として生まれている。この覚鑊は、石造学的には五輪塔の理論的組織者として著名な高僧である。特に彼が永治元年（一一四二）に著した「五輪九字明秘密釈一卷」は、真言念仏の標識として認識されていた五輪図形を論じ、五輪塔に宗教的根拠を明示した書として有名である。ただ、「醍醐寺新要録」や「義演准后日記」に見られる応徳二年（一〇八五）の「醍醐寺円光寺跡御骨石櫃内銅製五輪塔」や「東寺新造仏具 注進状」教王護国寺文書30）に見られる康和五年（一一〇三）の「仏舍利安置五輪塔 其内中石輪、水精五輪塔、金□塔各一基」（石造五輪塔最古の文献資料）など、覚鑊が生まれる前後には既に五輪塔が制作されていたことが知られている。そのことから、覚鑊の「五輪九字明秘密釈一卷」は、彼の誕生前後から国

内の一部で制作されていた五輪塔を彼の代に仏教的に理論化したものと位置づけられる。この「五輪九字明秘密釈一卷」がその後の中世日本の石塔に与えた功績は大きく、彼の説く真言浄土教の教線拡大に伴い、五輪塔が宝篋印塔と共に日本の二大石塔の一つとなった最大の根拠となるものと捉えられる。

次に、覚鑿は、仁和寺で秘密灌頂（かみじょう）（仏の位にのぼるための密教の儀式）を受けた人物でありながら浄土思想を同時に受け入れ、「大日如来と阿弥陀如来は同体」「極楽浄土は密教浄土の別名」と述べ、今ではあまり聞き慣れない「真言浄土宗」を主張した点も重要である。いわば密教化した阿弥陀信仰で、平安時代にあつては盛んだった天台念仏とライバル関係にあつたといわれている。実は、この真言念仏の影響を受けたと思われる石塔類が川棚町などで確認される。

川棚の永仁五年（一二九七）銘緑色片岩製五輪塔（写真6-17）は、長崎県内最古の紀年銘をもった五輪塔として有名である。この五輪塔は、その地輪四側面の銘文から、鎌倉時代後期の永仁五年に、源長盛の後家尼・比丘尼法阿が逆修のため生前中に造立した五輪塔であつたことが分かるが、この塔の重要性は、石造学的には形態・石材面などにあるが、資料的には銘文の内容にある。銘文は、二段造り地輪の上段四面に一〇四文字が陰刻されており、「東面」に「奉造立／塔婆一基／源長盛後家／尼為逆修立之／右志趣者為／比丘尼法阿／滅罪生前往／生極楽證大／菩提乃至法／界造立如件」、〔南面〕に「諸行無常／是生滅法／生滅々已／寂滅為楽」、〔西面〕に「本地法身／法界塔婆／大日如来／三摩耶形」、〔北面〕に「永仁五年丁酉／十一月三日比丘尼法阿／敬白／南無阿弥陀仏」となっている。

この銘文には、「博多日記」や「東福寺文書」以前の川棚町関係者として「源長盛」なる人物が刻まれているなど地方史研究上貴重な資料を提供しているが、特に宗教史及び塔の性格を知る上で「大日如来／三摩耶形」「比丘尼法阿／敬白／南無阿弥陀仏」の銘文は重要である。つまり、この五輪塔自体を大日如来の三摩耶形としながらも、末尾に「南無阿弥陀仏」と「法阿」（阿弥陀仏号を略した阿号）を併記しており、覚鑿の説く「大日如来と阿弥陀如来は同体」「極楽浄土は密教浄土の別名」の思想に通じる内容となっている。

また、東彼杵町岡遺跡出土の名号札も貴重である⑦。この名号札は、長さ二・五・四センチメートル、幅四・五センチメートル、厚さ〇・六

形カタの板札で、頭頂部を圭頭形（山形）にして両側に二段の切り込みを入れている。更にその下を縦長の身部として「種字「ア」（胎藏界大日如来）」と「南無阿弥陀仏」、裏面に「為祖父往生極樂也」と墨書している。時期は平安末から鎌倉初期頃かと思われるが、明らかに密教と浄土思想の融合がみられ、川棚・永仁五年塔と同系の宗教思想が読み取れる。鹿島にあっては、一二〇〇年代半ば頃に比定される筒口宝塔と一三〇〇年代初期頃と考えられる普明寺宝塔が、共にその塔身胴面に「阿弥陀三尊」と「釈迦如来」の種字を示していることは前述したとおりである。石塔類ではこの種字の配列は珍しく、長崎県内では時津町萬行寺の五輪塔水輪のみ一点が確認されるが、管見の限りでは九州圏内にあっても国分宝塔（鹿児島県 鎌倉時代）などで僅かに散見されるだけである。理念的には宝塔や五輪塔はそれ自体が大日如来の三摩耶形と解釈されるから、筒口宝塔や普明寺宝塔なども、川棚の永仁五輪塔と同じ宗教的環境の中にあつたものと位置づけられる。

これらの資料だけをもって覚鑊トクが説く真言浄土宗の遺品と断定することは早計かもしれないが、ただその可能性は非常に高い。

なにはともあれ、覚鑊上人の思想は、今後の調査・研究から、より身近に確認されてくるものと思われる。

（大石 久）

註

- (1) 松岡敦充『大村湾』超閉鎖性海域「琴の海」の自然と環境（長崎新聞新書〇―3）（長崎新聞社 二〇〇四）
- (2) 稲富裕和・橋本幸男他編『寿古遺跡』県営圃場整備事業福重地区にかかる遺跡発掘調査報告（大村市文化財保護協会 一九九二）、安楽 勉・伴耕 一朗・立平 進他編『白井川遺跡』彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 東彼杵町文化財調査報告書3（東彼杵町教育委員会 一九八九）、安楽 勉・久原 卷二・川畑敏則他編『岡遺跡』彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 東彼杵町文化財調査報告書2（東彼杵町教育委員会 一九八八）、東彼杵町教育委員会編『東彼杵町誌 水と緑と道』上巻（東彼杵町 一九九九）

- ③ 宮崎貴夫「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」(長崎県考古学会編『長崎県の考古学』中・近世研究特集 長崎県考古学会 一九九四)
- ④ 久山町教育委員会編『首羅山遺跡発掘調査概要報告書』久山町文化財調査報告第15集(久山町教育委員会 二〇一〇)、大木公彦・古澤 明・高津 孝・橋口 巨「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」(鹿大史学会編『鹿大史学』第五十七号 鹿大史学会 二〇一〇)、井形 進「薩摩塔の時空—異形の石塔をさぐる」(花乱社選書4(花乱社 二〇一〇)など。
- ⑤ 佐世保市文化科学館編『三島山経塚報告』佐世保市文化科学館文化財報告1(佐世保市文化科学館 一九七二)
- ⑥ 福岡県糟屋地区の滑石製品については、糟屋地区文化財担当者会編『糟屋の石—糟屋地区出土滑石製品の基礎資料』糟屋地区文化財担当者会共同研究事業1(糟屋地区文化財担当者会 一九九八)、山口県宇部市請川地区の石鍋制作については、山口県埋蔵文化財センター編『下請川南遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第104集(山口県教育委員会 一九八七)。また、和歌山県下の石鍋関係については、河内 一浩「和歌山県下における石鍋について」(日本中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会 一九九二)
- ⑦ 中野幡能「英彦山と九州修験道」(中野幡能『英彦山と九州の修験道』山岳宗教史研究叢書13 名著出版 一九八二)、波佐場義隆「脊振山修験の歴史と宗教活動」(中野幡能『英彦山と九州の修験道』山岳宗教史研究叢書13 名著出版 一九八二)
- ⑧ 大村・郡川周辺における熊野修験の影響については、大石 久「郡川周辺における中世寺院の性格について」とくに石造美術から見た天台密教系山岳仏教(修験)の影響について」(大村史談会編『大村史談』第三十四号 大村史談会 一九八九)
- ⑨ 三輪嘉六「里帰りした志岐の至宝—石造弥勒如来坐像について」(志岐市立—支国博物館特別講座資料 二〇一〇)、山口麻太郎「壹岐國史」(長崎県志岐郡町村会 一九八二)、安藤孝一「志岐出土石造弥勒如来坐像」(ニュー・サイエンス社編『考古学ジャーナル』135号 特集「一つの反省と提言」ニュー・サイエンス社 一九七七)など。
- ⑩ 井形 進「薩摩塔の時空—異形の石塔をさぐる」(花乱社選書4(花乱社 二〇一〇)、久山町教育委員会編『首羅山遺跡発掘調査報告書』福岡県糟屋郡久山町所在遺跡の発掘調査報告書 久山町文化財調査報告第16集(久山町教育委員会 二〇一〇)、久山町教育委員会編『首羅山遺跡発掘調査概要報告書』久山町文化財調査報告第15集(久山町教育委員会 二〇一〇)、平戸市史編さん委員会編『平戸市史』民俗編(平戸市 一九九八)、大木公彦・古澤 明・高津 孝・橋口 巨「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」(鹿大史学会編『鹿大史学』第五十七号 鹿大史学会 二〇一〇)
- ⑪ 井形 進「薩摩塔の時空—異形の石塔をさぐる」(花乱社選書4(花乱社 二〇一〇))

- 12 大石一久「中世の石造美術」(平戸市史編さん委員会編『平戸市史』民俗編 平戸市 一九九八)、大石一久「石が語る中世の社会
長崎県の中世・石造美術」ろうきんブックレット9(長崎県労働金庫 一九九九)など
- 13 高津 孝・橋口 亘・大木公彦「薩摩塔研究―中国産石材による中国系石造物という視点から」(鹿大史学会編『鹿大史学』第
五十七号 鹿大史学会 二〇一〇)、大木公彦・古澤 明・高津 孝・橋口 亘「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石とその岩
石学的分析による対比」(鹿児島大学理学部編『鹿児島大学理学部紀要 The Reports of Faculty of Science, KAGOSHIMA
University』vol.42 鹿児島大学理学部 二〇〇九)
- 14 高津 孝・橋口 亘・大木公彦「薩摩塔研究―中国産石材による中国系石造物という視点から」(鹿大史学会編『鹿大史学』第
五十七号 鹿大史学会 二〇一〇) 三一頁
- 15 前掲註(14) 三五頁
- 16 久山町教育委員会編『首羅山遺跡発掘調査概要報告書』久山町文化財調査報告第15集(久山町教育委員会 二〇一〇)
前掲註(11)
- 17 前掲註(11)
- 18 前掲註(11)
- 19 前掲註(11)
- 20 久田松和則「古代の志々伎神社」(平戸市史編さん委員会編『平戸市史』自然・考古編 平戸市 一九九五)
前掲註(16)
- 21 「安満岳図」(寛永二十一年・天明七年写)では、現在の神社の地に「宮」としてある。恐らく神社本殿(拝殿含む)は中世以来ほ
んど変化は無く、現住地に建っていたものと思われる。この点は、同じ「安満岳図」に描かれている中世からの遺構と思わ
れる自然石を積み上げた参道や西禅寺(寺)としての二の鳥居側に(明記)の配置からも首肯される。
- 22 前掲註(16)七三頁に「首羅山遺跡の宋風獅子は、恐らく人為的に破壊された結果、一見したところでは、ただの石の塊のよう
になっているもの(以下略)」とある。この人為的破壊の背景に何があるのか報告書では述べられていないが、異国の神々が付
帯するモノへの反発があったのかもしれない。
- 23 大石一久「日引石塔に関する一考察―とくに長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について」(石造物研究会編『石造物
研究会誌 日引』第1号 石造物研究会 二〇〇一)など
- 24 郡川周辺の中世・諸寺院の宗旨変化については大石一久「郡川周辺における中世寺院の性格について―とくに石造美術から見
- 25

- ②⑥ 上天台密教系山岳仏教(修験)の影響について」(大村史談会編『大村史談』第三十四号 大村史談会 一九八九)
- ②⑦ 牛窪弘善「修験道綱要」(名著出版 一九八〇) 二四八頁に当山派(真言宗)の階級として「権律師」、また「阿闍梨」がある。
- ②⑧ 東脊振村教育委員会「靈仙寺跡」(東脊振村文化財調査報告書第4集(東脊振村教育委員会 一九八〇))
- ②⑨ 五来 重「修験道史研究と修験道資料」(行智・五来 重編注「木葉衣・鈴懸衣・踏雲録事」修験道史料1(東洋文庫二七三) 平凡社 一九七五)、中野幡能「英彦山と九州の修験道」(山岳宗教史研究叢書13(名著出版 一九八二))
- ③① 藤野 保編「大村郷村記」第二卷(国書刊行会 一九八二)
- ③② 東光寺跡で確認される文明十年(一四七八)銘の宝篋印塔基礎に「為物故道善靈禪門」、天文十年(一五四二)銘の五輪塔地輪に「良秀禪定門」とある。また、現在の妙宣寺墓地内には「全住當庵/南 薫禪師/莊嚴報地者也 /應永十三 二月八日/弟子等敬白」と陰刻された宝篋印塔の基礎がある。そのほかの石塔銘文については大石一久「大村地方における中世期石造美術について(その一)」(大村史談会編『大村史談』第二十七号 大村史談会 一九八四)
- ③③ 久田松和則「築城以前の三城周辺」(大村史談会編『大村史談』第二十一号 大村史談会 一九八二)
- ③④ 藤野 保編「大村郷村記」第五卷(国書刊行会 一九八二)
- ③⑤ 網野善彦「海と列島の中世」(日本エディタースクール出版部 一九九二)、網野善彦「日本」とは何か(講談社 二〇〇〇)
- ③⑥ 大石一久「大村地方における中世期石造美術について(その二)」(大村史談会編『大村史談』第二十七号 大村史談会 一九八四)
- ③⑦ 東彼杵町教育委員会「東彼杵町誌 水と緑と道」上巻(東彼杵町 一九九九)
- ③⑧ 大石一久「佐世保の中世・石造美術」(佐世保市史編さん委員会編『佐世保市史』通史編上巻 佐世保市 二〇〇二)
- ③⑨ 満井録郎「中世彼杵庄の一考察 鎌倉・室町初期を中心として」(大村史談会編『大村史談』第七号 大村史談会 一九七二)
- ④① 多田隈豊秋「九州の石塔」上巻(西日本文化協会 一九七五) 二〇一頁
- ④② 川勝政太郎「逆修信仰の史的研究」(大手前女子大学編『大手前女子大学論集』6号 大手前女子大学 一九七二)
- ④③ 前掲註(38)
- ④④ 大石一久「地方における中世石塔造立階層の問題について」(史迹美術同攷会編『史迹と美術』(通号) 57号 史迹美術同攷会 一九八七)
- ④⑤ 開 正和「東彼杵町の清心寺跡」(大村史談会編『大村史談』第三十三号 大村史談会 一九八八)

- 43 慶嚴寺交名碑と時衆(宗)の関係については、山口八郎「實隆公記」の中の西郷尚善(長崎県地方史研究会編『長崎県地方史だより』長崎県地方史研究会会報 第三十七号 長崎県地方史研究会 一九九二) 三頁
- 44 前掲註(29) 二二六頁
- 45 前掲註(29) 三五八頁
- 46 松岡 史「肥前の板碑」芸文社 一九八四) 五頁
- 47 前掲註(38) 二〇〇頁
- 48 前掲註(46)
- 49 外山幹夫「中世九州社会史の研究」(吉川弘文館 一九八六)。この中で大村氏の領国支配に関する混乱が述べられている。
- 50 豊田 武「宗教制度史」豊田武著作集第5巻(吉川弘文館 一九八二) 一一四〜一六頁
- 51 大石一久「郡川周辺における中世寺院の性格について」とくに石造美術から見た天台密教系山岳仏教(修験)の影響について(稲富裕和・橋本幸男編『稗田遺跡』弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書 稗田遺跡調査会 一九八八)
- 52 前掲註(27)
- 53 上下端しにホゾ穴をもつ特殊な水輪であり、そのホゾ穴内部の面幅が一・二×一・五センチという彫出方法からも、十四世紀の半ばから後半頃の制作時期が想定される。
- 54 「西日本新聞」一九八二年十二月二十二日
- 55 前掲註(54)
- 56 前掲註(51)
- 57 前掲註(54)
- 58 森本 武「郷村記の中の聖寶寺と現存する石塔群について」(大村史談会編『大村史談』第五十号 大村史談会 一九九九)
- 59 宮崎五十騎「宗珍大禪定門逆修の碑銘について」(大村史談会編『大村史談』第二号 大村史談会 一九六六)
- 60 大村市立史料館寄託 大村家史料(請求番号)一〇一一二「大村家記」卷之一「大村家歴代之事」
- 61 大村市立史料館寄託 大村家史料(請求番号)一〇一一四「大村家記」卷之四、藤野 保編『大村郷村記』第二卷(国書刊行会 一九八二) 一七八頁

〔62〕 外山幹夫「大村氏に関する一・二の問題」〔大村史談会編「大村史談」第二十七号 大村史談会 一九八四〕

前掲註〔36〕

〔64〕 郷土文化研究所編『統肥後国古塔調査録』熊本県史料集成第7巻（日本談義社 一九五三）、菊池市史編さん委員会編『菊池市史』

上巻（菊池市 一九八二）

〔65〕 高橋順次郎・渡辺海旭都監、小野玄妙編集（普及版）大正新脩大藏経」第79巻「統諸宗部」（10） No.25—4（大蔵出版

一九九二）

〔66〕 前掲註〔41〕

〔67〕 前掲註〔36〕、安楽 勉・久原巻一・川畑敏則他編『岡遺跡』彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 東彼杵町文化財調査報告書2（東彼杵町教育委員会 一九八八）など

参考文献

下川達彌「第三章 西海地域の生活文化 三 西北九州の石鍋とその伝播」〔網野善彦責任編集「海と列島文化」第4巻「東シナ

海と西海文化」小学館 一九九二）

第四節 大村の仏像

日本に仏教が伝えられたのは六世紀半ばのこと。それから連続とつぐられ、伝えられてきた各地の仏像や神像は、その土地の信仰とともに固有の歴史や文化をいまに知らせる。

長崎の唐寺に安置される中国色の濃い仏像は、この街が江戸時代の貴重な中国交易の窓口であったことを物語って雄弁であるし、太宰府市観世音寺の五層を超える平安時代の巨像群は、古代九州の政治の中心であった当地の様子をしのばせる。松浦志佐氏の菩提寺である寿昌寺の本尊如意輪観音像は、数年前の調査により、体内の墨書銘が確認され、康永三年（一三四四）につくられたことがわかった。そしてその制作の背景を探るうちに、熊野信仰との結びつ

きがあきらかとなり、寿昌寺の背後にそびえる不老山、落合の滝、脇を流れる志佐川は、熊野の那智山、那智滝、那智川になぞらえられていると考えられるようになった¹⁾。二十一世紀の日常のなかにある山や川が六五〇年前の熊野那智とつながり、風景が歴史的な意味をおび、それまでとは違ってみえるようになったのである。

大村の古代・中世はどうであったろうか。大村市内はもとより、東彼岸町、川棚町、波佐見町、西海市、佐世保市宮地区など、大村氏が領有していた地域について、それぞれの市町の教育委員会と協力して調査を行った。その成果について特筆すべきものをあげるとすれば、大村市弥勒寺町周辺において、平安時代の石仏が多数確認されたことが筆頭であろう。これらの石仏を単体で見れば、いつの頃につくられたものであるか判断としないが、佐賀県内に類例があり、平安時代後期の制作と考えて間違いない。当地の平安時代を知りうる貴重な発見である。また、波佐見町東前寺の本尊薬師如来像の体内からは、応永十年（一四〇三）の経典が見いだされた。県央最古の記年銘彫刻である。ほかにもいくつかの注目すべき資料が見いだされているが、調査区域が広域にわたることを勘案すると成果はあまりにも少ない。キリスト教への改宗期に行われた寺社の棄却のためと思われる。のこされたものはわずかではあるが、以下に簡単な紹介を行いたい。なお、この第二巻は中世編であるため、とりあげる対象は原則として中世の資料となるが、中世の歴史とかかわりの深い資料やとくに重要なものについては、制作時期にかかわらず掲載した。

菩薩像（個人蔵）

総高（台座・光背含）二一・七センチの石造。西彼岸半島で産出する滑石から半肉状に彫りだされている。宝冠をいただし、左肩からたすきがけに条帛じょうはくを身につけ、両肩から天衣をたらす菩薩の姿である。耕作中に出土したと伝えるが、現状は照りのある黒色を呈していて、護摩等によっていぶされたかのような印象を与える。左頬から肩にかけてを欠いているが全体に磨滅は少なく、制作当初の面影をよくのこし、頭体の比例の整った姿は上品である。背面からみると、周縁部は面取りがなされていて、丁寧なつくりであることがわかる。近隣の弥勒寺地区に、ほぼ同

じ大きな滑石の石像が数躯あり、そちらのほうがやや風化がすすんでいるが、背面はやはり面取りがなされていて、本像と同時期に制作されたものと考えてよい。

同様の滑石半肉彫りの例は、佐賀県鹿島市見性寺参道、佐賀市與止^{よと}日女^{ひめ}（淀姫）神社、佐賀県唐津市殿原寺などで確認されている。ほかに同種のものとして、やや大型だが吉野ヶ里町霊仙寺跡から出土した蛇紋岩製のものがある。これは、陶製経筒や瓦経などの共伴遺物から平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての十二〜十三世紀のものである。また、弥勒寺町近隣には滑石製経筒が

伝来している。滑石の石仏と滑石製経筒、両者を直接に結びつけることは現時点ではできないが、この時期の弥勒寺地区周辺に質の高い仏教文化が存在したことは間違いない。

薬師如来像(大村市 東光寺跡)市指定有形文化財

総高(台座含)一三・〇センチ、像高一〇・四センチの銅製の坐像で、台座と本体は別に鑄造して鑄継いでいる。通常の蓮華座ではなく、岩に坐して左手に薬壺を持つ。異国的な作風で、脚部の幅が狭く、衣文線をほとんど刻まない点は、明・清時代の仏像や仏画でしばしば見られるものである。現時点では中国での制作とみておろすが、顔の表情や衣のひだのうねりが少しばかり穏やかで抑制のきいたものであることはやや異質で、中国の影響を受けて長崎あたりで制作されたことも



写真6-30 薬師如来像(東光寺跡)



写真6-29 菩薩像
(側面/個人蔵)

※正面写真は巻頭に掲載

考えられる。

大村氏の領内には、ほかに本地寺(東彼岸町)、百津観音堂(川棚町)、東前寺(波佐見町)、波佐見町個人宅、遠照院(西海市)などに明、清もしくは長崎あたりで制作されたと考えられる小金銅仏がある。これらは黄檗宗など、長崎にゆかりのある寺院でしばしばみられるもので、江戸時代以降に現在地にもたらされたものであろう。中世以前の交易が盛んであった対馬などに伝わる金銅仏が朝鮮半島のものが中心であるのとは対照的である。

十一面観音御正体(懸仏)(大村市 矢房神社) 市指定有形文化財

鏡面の直径が二二・〇センチメートルの御正体。通常とは異なり、鏡面と本体を一度に鑄造していて、裏面から見ると仏像の形状にへこみ、鑄型の土ののこっている。御正体は日本独自の神仏混淆のなかで発展してきたもので、外国での制作は考えにくい。頭上の仏面が左右に大きくはりだして強調されている点はいかにも中国風である。波佐見町東前寺の御正体と同様に、江戸時代に長崎あたりで制作された可能性が高い。矢房神社は万治元年(一六五八)に再興されたと伝えるので、制作の時期はそのころであろう。

阿弥陀如来像(大村市 長安寺) 市指定有形文化財

京都の知恩院から寛政八年(二七九六)に奉渡されたと伝えられる総高(光背)



写真6-32 阿弥陀如来像(長安寺)



写真6-31 十一面観音御正体(矢房神社)

台座含）一二四センチメートルの立像。体の奥行のないおやかな体形で平安時代後期の典型的な様式をしめしている。首や胸腹部のくびれはややぎこちない印象を与えるが、寛政八年に本尊として迎えられるさいに、形状がはつきりするようになりなされたのであろうか。さらびやかな彩色や台座、光背、脇侍の菩薩像もこのときに整備されたものと推測される。本尊とは別に庫裡に安置される阿弥陀如来像の坐像は、寛政八年以前の本尊という寺伝がある。職業的仏師の作品ではないので制作年代の判断は難しいが、近世初頭の当寺復興時につくられたと考えて矛盾はない。

虚空蔵菩薩像（東彼杵町 個人蔵）

総高（台座含）一六・七センチメートル、像高八・七センチメートルの銅製の坐像。右手に剣、左手に宝珠を持つ虚空蔵菩薩の姿をあらわす。当地から北北東数キロメートルに位置する虚空蔵山の信仰にかかわるものであろうか。

一九八〇年に刊行された『長崎県文化財調査報告書 第四九集

佐世保市とその周辺地区の文化財』で言及されており、中

国での制作と想定されている。その可能性も否

定できないが、波佐見町・東前寺に伝わる白山

権現の十一面観音御正体（懸仏）などが類例とし

てあげられ、江戸時代の十七〜十八世紀に明く

清彫刻の影響を受けて長崎の鋳物師が制作したことも

考えられる。

薬師如来像（波佐見町 東前寺）

像高二八・〇センチメートル、彫眼、寄木造りの坐像③。

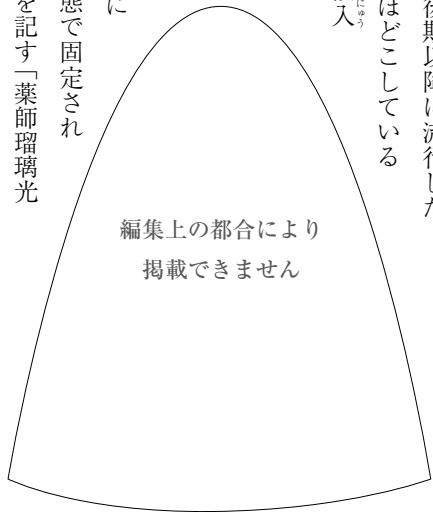
『大村郷村記』に記す「本尊 薬師如来 木座像、黒色、長九寸、行基菩薩作」に該当する。

現状は古色を呈し、一部に金箔や漆が見えるが後世の修理時のものかもしれない。左手に薬壺を持つ一般的な薬



写真6-33 虚空蔵菩薩像（個人蔵）

師如来の姿で、やや大きめの頭部、大粒の螺髪（わかま）などは鎌倉時代後期以降に流行した型を継承している。小像でありながら寄木造りとし、内刳（うちく）りをほどこしているところには手なれた彫技が見うけられる一方で、目に水晶を嵌（かんじやう）入（い）しないところ、おおらかな顔立ちや彫りの浅いざつくりとした衣文には、都ぶりとはことなる在地の素朴な気分が感じられる。



編集上の都合により
掲載できません

写真6-34 薬師如来像（東前寺）

編集上の都合により掲載できません

写真6-35 宝篋印陀羅尼（薬師如来像納入品）（東前寺）

内刳りされた体内に經典類がおさめられており④、未表装で卷子状（かんす）にまかれ、首の部分に挿し込まれた状態で固定されていた。応永十年（一四〇三）の年紀を記す「薬師瑠璃光如来本願功德経」と「宝篋印陀羅尼」はこの仏像の完成・開眼にあたって書写されたものである。大村領内で制作年があまりかな最古の仏像であることがわかる。經典類に名を記す宗堯については不詳。仏師念仏法眼についても事績は知られないが、さきにみた作風からみて、在地の仏師であろうと推測される。

修理に関する文書が一点、二つに折りたたまれ、「薬師瑠璃光如来本願功德経」に巻きこまれていた。天文二年（一五三三）に仏師有牧が観音像と勢至像を再興したこと、心月叟がかかわったことがわかる。再興とは、古い仏像を修理した場合にも、新しくつくり直した場合にも用いられる言葉であるが、観音像も勢至像も現存していないためどちらかは判断できない。薬師如来にしたがうのは日光菩薩と月光菩薩であり、阿弥陀如来にしたがう観音菩薩と勢至菩薩と記されるのは不審であるが、墨書の体裁が「宝篋印陀

「羅尼」の奥書に準じていることも勘案すると、この再興は本像にかかわるものと考えるのが妥当である。「日光月光」と書くべきところを誤記したのかもしれないが、この時期、この仏像が阿弥陀如来像として信仰されていた可能性も捨てきれない。

この薬師如来像は、キリスト教徒による廃仏以前の木彫像として確認される二例目であり、これまで知られていた佐世保市宮地区正蓮寺の阿弥陀如来像をさかのぼる県央最古の記年銘作品となる。東前寺は、寛永六年（一六二九）以前は波佐見町金屋に所在していた。当地は嬉野にほど近い大村領の周縁部であり、廃仏に際しては越境して災禍を免れたのかもしれない。

幸天三所明神御正体（懸仏）（波佐見町 東前寺）

『大村郷村記』の記述では、幸天三所明神（現在の波佐美神社）の御神体は、「左薬師如来／中尊阿弥陀如来／右十一面観世音／神体各金座像、円形ニ鑄附」であるといい、現在は東前寺に伝わるこの三面の御正体が該当するとみて間違いない。

幸天三所明神は、天正二年（一五七四）にキリスト教徒に焼かれたあと、衰退していたというが、大村喜前が再興して波佐見の総鎮守としたという。貞享二年（一六八五）に岳辺田（現在地か）に遷座しているが、その開眼導師は東前寺の僧侶がつとめている。この三面の御正体は、明治初の神仏分離令にともない、幸天三所明神に隣接しゆかりの深い東前寺に移されたのであろう。

三面ともに銅造鍍金。阿弥陀如来御正体は、鏡面径三六・五センチメートル、像高一・五センチメートル。薬師如来御正体は、鏡面径（内郭）三一・五センチメートル、外郭半径三・五センチメートル、像高二一・〇センチメートル。十一面観音御正体は、鏡面径（内郭）

三〇・三センチメートル、外郭半径三・五センチメートル、像高二一・七センチメートル。

編集上の都合により
掲載できません

写真6-36 幸天三所明神 薬師如来（東前寺）

この三面の御正体は、現在は木製の厨子に安置されているが、厨子が狭小であるため、阿弥陀如来御正体は鏡面を折り曲げ、薬師如来御正体と十一面観音御正体は鏡面外郭のほとんどを切除している。もともとは、三面ともにほぼ同じ鏡面径であったようだが、阿弥陀如来御正体と他の二面では鏡面の厚みや仏像の大きさが異なる。両者は別に制作されたものと考えられるが、制作の時期に大きなあたりはないであろう。

阿弥陀如来御正体に銘はないが、他の二面の背面には「貞享四年／卯十二月／長崎寺町／仏師半助（薬師如来御正体は半助敬作）」の朱銘が記され、十一面観音像には花押が墨書されている。貞享四年（二六八七）に長崎寺町の仏師半助が制作したことがわかる。眼球のふくらみを強調し、口角をあげる顔立ちや、薬師如来の腹部に衣の結び紐がみえる点などに強い中国風がみられる。承応三年（一六五四）の隠元禅師の来日以来の中国文化の流行、その発信地であった長崎にふさわしい作風をしめしている。仏師半助については不詳であり、長崎の仏師にふれた熊本県立美術館の展覧会図録『仏教美術の新しい波』（二〇〇二）には登場しない。長崎の鋳物師を集成した渡邊庫輔の私家版『長崎の鋳物師』（一九五三）にも半助の名はみえない。ただし、正徳四年（一七二四）には半助と同じ寺町に鋳物師赤星秀悦がいたことが記されている。赤星は、この御正体と同じような半肉の仏像の作例があり興味をひかれる。両者の関

編集上の都合により掲載できません

編集上の都合により
掲載できません

編集上の都合により
掲載できません

写真6-39 十一面観音銘文

写真6-38 幸天三所明神 十一面観音（東前寺）

写真6-37 幸天三所明神 阿弥陀如来（東前寺）

係については今後の検討課題であろう。なお、『大村郷村記』には、御正体と思われる神仏の記載が多くある。ほとんどは近世のものと思われるため今回は調査の対象としなかったが、今後それらの研究にあたっては、この御正体は制作年や制作地がはっきりした基準作として、大きな意味をもつであろう。

十一面観音御正体（懸仏）（波佐見町 東前寺）

編集上の都合により
掲載できません

写真6-40 十一面観音御正体（東前寺）

総高一四・八センチメートルの銅像で、鏡面を失っているが御正体の尊像である。下半身にまとう衣が胸ちかくまでおおうことや、結び紐を絞って強調する腰のくびれ、大きな腕飾りに異国風が感じられるが、日本独自の神仏混淆の産物である御正体であるので国産と考えることが妥当である。円柱状のホゾを使って鏡面と固定する構造は、同じ東前寺の幸天三所明神御正体と同様であるので、この御正体も長崎で制作された可能性が高い。

『大村郷村記』には東前寺の鎮守であった白山権現の神体について「神体唐金座像、円相之内二鑄附、長四寸一分、本地十一面観音」と記す。四寸二分（二センチメートル）という長さの解釈が問題であるが、台座をのぞき仏像本体だけををはかるとほぼその数値になる。唐金という言葉も、さきに見た異国風の作風を表現したものと解釈できよう。

阿弥陀如来像（波佐見町 安楽寺）

仏像本体と台座をあわせた総高四・六センチメートルの小さな立像。阿弥陀如来を意味する「不可思議光」と墨書された木箱におさめられている。来迎印を結んでいるのかもしれないが、手はあまりにも小さく確認できない。

同様の小金銅仏は各地で確認されており、太宰府付近の出土といわれる奈良国立博物館の永久四年（一一一六）銘の経筒に付随するものが上等で有名であるが、近隣では佐賀県の嬉野市塩田町や鳥栖市、熊本県の玉名市から出

土している⑤。嬉野市の仏像は平安時代後期とされ、鳥栖市のものは、共伴遺物や衣の袖がゆらぐ表現から鎌倉時代の制作であろうと考えられている。安楽寺の如来像も平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものである。この如来像と一緒に、銅造で像高五・七センチの観音菩薩像、銅造で総高三・二五センチの千手観音御正体が一緒に伝えられている。観音菩薩像は江戸時代、千手観音御正体は鎌倉～南北朝時代のものであろう。

この阿弥陀如来像と千手観音御正体は、大村領内では極めて貴重な中世の資料であるが、いずれも移動が容易な小品で伝来の詳細も不明であるため、当地の歴史の中に位置づけることは難しい。

阿弥陀如来像（佐世保市 正蓮寺）

像高七七・〇センチの坐像。松かと思われる針葉樹材から彫りだした一木造り。

後世に塗られた漆や金箔のために判然としないが、目に水晶を入れる玉眼の技法はもちいていないようである⑥。新旧二つの台座が残り、新台座の蓮弁と旧台座の蓮肉部側面が古く、当初のものである可能性がある。新台座を制作する際、墨書をのこすために旧台座を保存したものと推測される。旧台座蓮肉部側面は輪切りにした木材を外縁部をのこして内割りしている。松ヤニが噴きだしているため松材であることは間違いない、木目が似かような仏像本體も松材であると推測される。

旧台座には天板と側面に墨書銘が記されている⑦。側面には明治三十三年（一九〇〇）の修理を長崎県南高来郡鳶原町字高鳶丁の仏師長門愛蔵が行ったことを記す。注目されるのは、天板の銘である。一部文意をとりづらいが、文政九年（一八二六）に彩色をあらためたが、損なうところがあったので、慶応元年（一八六五）に再び彩色したやうで、大村丹後守、寺社奉行渡辺某の名がみえる。このころ既に「郷村記」は完成しており、『大村郷村記』にこの

編集上の都合により掲載できません

写真6-41 観音菩薩像、阿弥陀如来像、千手観音御正体（安楽寺）

編集上の都合により掲載できません

写真6-43 旧台座天板裏面墨書(中)

人についてほかに事績は知られていない。仏師と名乗らな
いことや老僧の雅号のような名は非專業の仏像制作者であるこ
とを推測させるが、仏像制作に適しない松材を使用していること、ほぼ一木丸彫りの素
朴な構造、水晶加工の特殊な技術を要する玉眼の技法を採用しないことなど、仏像本体
からも納得される。この仏像が制作された十六世紀ころは、小規模な活動を行う在地の
仏師や非專業の仏像制作者が目につく時期である。一例をあげれば、平戸藩領内の銘記
等を収集した「家世集古附録巻第一」には、このころの仏像制作者として、吉安、永種、
金剛仏師、今宮大宮司窪田八郎左衛門、嘯月、津国住呂專鏡坊、原隠岐守、筑前感定軒
楊原住高予などの名が散見される。彼らの事績として知られるものはそれぞれ一、二に
とどまり、長期にわたって大規模な制作を行っていたとは考えにくい。戦国時代の荒廃

仏像についても記述があるので、領内ではまれな由緒ある古像であることを藩とし
て認識しており、修理に参与したのであろう。この銘文は体内の墨書を写しとっ
ているが、それはこの仏像の造立当初のものとみてよく、大村氏以
前に当地を治めていた宮村能登守通定が檀那となつて
いる。制作の年として永正五年己巳と記すが、永正五年
(一五〇八)の干支は戊辰で己巳は永正六年である。六
を五と写し間違えたのであろうが、干支の誤記であるか
もしれず、体内の墨書そのものをみることでできない今
はいずれか断言できない。

銘文からは、この仏像の作者が妙音寺の有池叟であることもわかるが、この

編集上の都合により
掲載できません

写真6-42 阿弥陀如来像(正蓮寺)

編集上の都合により掲載できません

写真6-44 旧台座天板裏面墨書(下)

のなかで博多などの都市は戦火にまきこまれる。そこを拠点としていた伝統的な仏所や仏師が疲弊し、安定的な供給がとれたところに、在地の仏師や非專業の仏像制作者が登場する余地がうまれたのかもしれない。作者の有池叟もそのような一人であろうが、この阿弥陀如来像を素直にみると、等身に近い大きさの像をうまくまとめている手腕はなかなかのものである。とくに頭部と体部の比例は適切であり、手本となったであろう鎌倉時代後期頃の仏像を彷彿とさせる。

この阿弥陀如来像は、現在は正蓮寺に預けられているが、古来地域でもり伝えられてきた。キリスト教徒による天正期の廃仏の際、地域の人々はこの阿弥陀如来像を背負い逃げたという伝承がある。松浦領との境界の地であることが幸いしたのであるが、伝統的な信心の力によって歴史がまもられたことはありがたい。

なお、この阿弥陀如来像は信仰上の理由から秘仏とされ、一般公開は行われていない。

以上にみてきたように、大村氏の領内であった地域には、中世の仏像や神像はほとんど伝わっていない。江戸時代に京都から移座された長安寺の例は別として、平安時代や鎌倉時代の木彫像は一例もなく、中世の仏画や仏具類も確認されない。周辺地域をみると、長崎市野母崎の観音寺、佐世保市の浄漸寺、平戸市の大聖寺に平安仏が伝えられ、平戸市田平の熊野神社には、鎌倉時代の御正体(懸仏)が多数伝来している。このことを勘案すれば旧大村領の状況は尋常ではなく、天正期のキリスト教徒による寺社の棄却に起因するものと考えざるをえない。

宣教師ルイス・フロイス『日本史』に大村純忠の改宗の記述があるが、司祭はドン・バルトロメウ(大村純忠)に対

して「殿がデウスに感謝の奉仕を示し得るには、殿の所領から、あらゆる偶像礼拝とか崇拜を根絶するに優るものはない」と述べ、「大村の全領域には、いともおびただしい数の偶像とか、実に多数かつ豪壮な寺院があつて、それらを(すべて)破壊する」ことを求めたのである(8)。後世の記録になるが『大村郷村記』の宝円寺についての記述には、天正二年(一五七四)大村純忠とその臣民がキリスト教に改宗したために、神社仏閣は焼亡し、旧来の神像靈仏は灰燼に帰したという(9)。他領のことになるが、鳥原の加津佐の岩殿と呼ばれる洞窟に隠されていた多数の「仏像はただちに割られて全部薪にされ、かなりの日数、炊事に役立った」といい、それらの仏像は「実に丹念、かつ絶妙に造られていたらしい(10)。

ふるい記録は彼我ともに大村の神仏の喪失を伝え、いまの調査はそれを確かめることとなった。信仰だけではなく、この地の歴史や文化もともに失われたことは残念でならないが、これも一つの大村の歴史であり、他の地域と画するものと納得するほかはない。

(竹下正博)

註

- (1) 竹下正博「肥前松浦寿昌寺の如意輪観音像」(東京国立博物館編『MUSEUM』第614号 東京国立博物館 二〇〇八)
- (2) 東脊振村教育委員会編『靈仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第3集 (東脊振村教育委員会 一九七九)
- (3) 詳しい品質・構造等は次のとおり
坐像 像高二八・〇センチメートル 髮際高二四・五センチメートル
檜材、寄木造り、彫眼、漆箔(後補充)
頭体根幹部は前後二材から彫り出し、両体側各一材と脚部横一材を刳ぎつける。両袖各一材、両手首先各一材、葉壺一材。左袖に小片の一材を補う。内割りをほどこし、像底板をはめる。肉身部に漆箔、口唇に朱がみられるが当初のものか不明

(4)

〔薬師瑠璃光如来本願功德経(体内納入品)墨書〕

応永十癸閏十季

歳二十五 宗堯敬白

〔宝篋印陀羅尼(体内納入品)墨書〕

宗堯

応永十年十月 仏師念仏法眼生年五十九

〔修理文書(体内納入品)墨書〕

謹奉再興観音勢至

天文二年癸巳三月吉日敬白

五第心月叟

生年五十

仏師有牧

生年三十七

(5)

鳥栖市と嬉野市の事例は、佐賀県教育委員会編『柚比遺跡群4』佐賀県文化財調査報告書第158集（佐賀県教育委員会二〇〇三）に報告されている。玉名市の作例は玉名市歴史博物館に寄託

(6)

詳しい品質・構造等は次のとおり。

坐像 像高七七・〇センチメートル 髪際下六六・〇センチメートル 白毫下六五・〇センチメートル

(新) 台座高一五・〇センチメートル 台座径七七・二・〇センチメートル

(旧) 台座高一四・五センチメートル 台座径五七・五センチメートル

永正六年(一五〇九)もしくは五年(一五〇八)

針葉樹(松カ) 一木造り、彫眼、漆箔(後補)

頭体根幹部は、木心を前面中央にはずした針葉樹の一材から彫り出す。内割り、頭部と体部それぞれ別に、背面から長方形に行い、板状の材でふさぐ。左体側部は縦一材を根幹部材に寄せ、後方の小材を補う。左前(一部後補材)と手首先を各一材でつくる。右腕は、上膊、前膊、手首先を各一材でつくり、上膊後方には小材を補う。脚部は、木心を含む横一材から彫出し、幅三センチメートル程度の平鑿で底面から浅く内割りをほどこす。裾の先端は、板状の材に小材二片を補い、脚部に翹ぎよせる。体幹部に比して脚部が大きいのが当初の部材と思われる。両手首先後補の可能性あり。左手第一指欠落、第三指欠失。

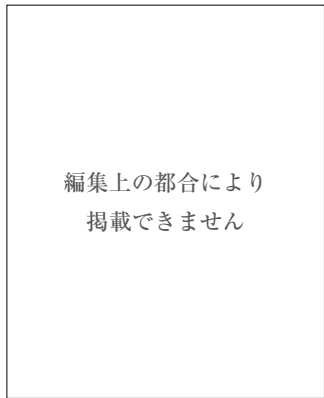


写真6-45 〈薬師如来像納入品〉修理文書

7

台座は仰蓮部のみ新旧二点が現存する。新台座の蓮弁と旧台座の蓮肉部側面が古く、当初のものである可能性がある。新台座を制作する際に、墨書を残すために旧台座を保存したものと推測される。旧台座蓮肉部側面は輪切りにした松材を外縁部を残して内割りし、周囲に幅八ミリの程度の板を打ちまわす。仏像本体と木目が似かよう。

【旧台座天板裏面墨書(上)】慶応元年(一八六五)修理

于時慶応元五天ノ霜月今改彩色スノ当山十三代住法音代ノ舎第法城数年之ノ就願望奉如来厨子ノ并内陳奉彩色之ノ世話方菟坂莊助ノ仏師生国島原ノ川棚町住人ノ□田新平ノ□□啓蔵

【旧台座天板裏面墨書(中)】※一部永正写

阿弥陀如来背内銘写ノ于時永正五己巳七月下旬ノ肥前国彼杵村宝杵山妙ノ音寺住山作者有池叟ノ大檀那宮村能登守ノ通定ノ大願主大安住山ノ令玄首坐ノ誌之ノ右観経中品下生之尊像也ノ此人命欲終時遇善知識ノ為其広説阿弥陀仏ノ国土樂事亦説法蔵ノ比丘四十八願聞此事ノ已尋即命終譬如ノ壮士屈伸臂頂即生ノ西方極樂世界ノ応知ノ先年文政九巳七月十六日ノ法順代有彩色所損

【旧台座天板裏面墨書(下)】

大村丹後守(以下判読不能)

寺社奉行

渡辺 (以下不明)

横目野田新 (以下不明)

氏子世話 (以下不明)

山道恒左工門 (以下不明)

同姓嘉 (以下不明)

【旧台座蓮肉部側面内墨書】明治三十三年(一九〇〇)修理

長崎県南高来郡ノ高原町字高嵩丁ノ仏師長門愛蔵ノ明治三十三年初夏ノ弥陀尊并二御厨子トモノ彩色之ノ武宮力精上人ノ十四代内ノ彩色ス

8

松田毅一・川崎桃太訳『日本史』10 西九州編Ⅱ(中央公論社 一九七九)第二章

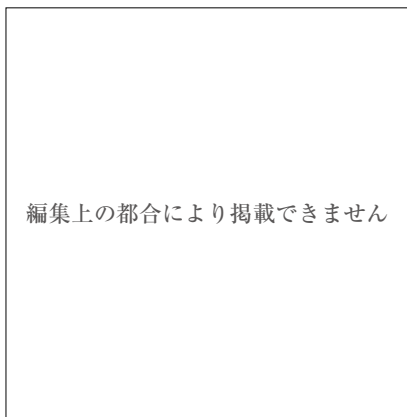


写真6-46 旧台座天板裏面墨書

(9) 「天正二甲戌、同氏丹後守純忠(中略)及臣民陷溺南蛮之妖教崇信耶穌宗門而焼亡神社仏閣且殺害僧徒(中略)惜哉旧来神像靈仏

罹邪徒一炬忽為灰燼」

(10) 前掲註(8) 第四四章

参考文献

長崎県教育委員会編『佐世保市とその周辺地域の文化財』長崎県文化財調査報告書第四九集(長崎県教育委員会 一九七九)

藤野 保編『大村郷村記』第一卷～六卷(国書刊行会 一九八二)

熊本県立美術館編『仏教美術の新しい波』キリシタン以後の天草の仏像(熊本県立美術館 二〇〇二)

公益財団法人 松浦史料博物館保管 「家世集古附録巻第一」